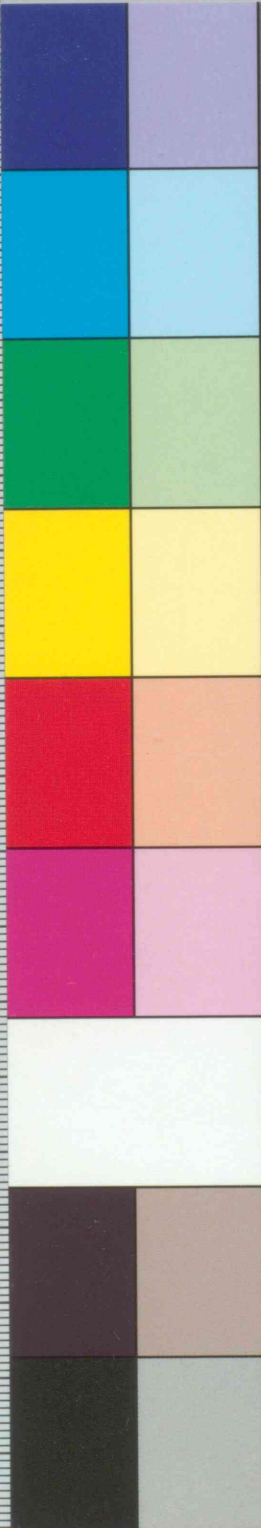
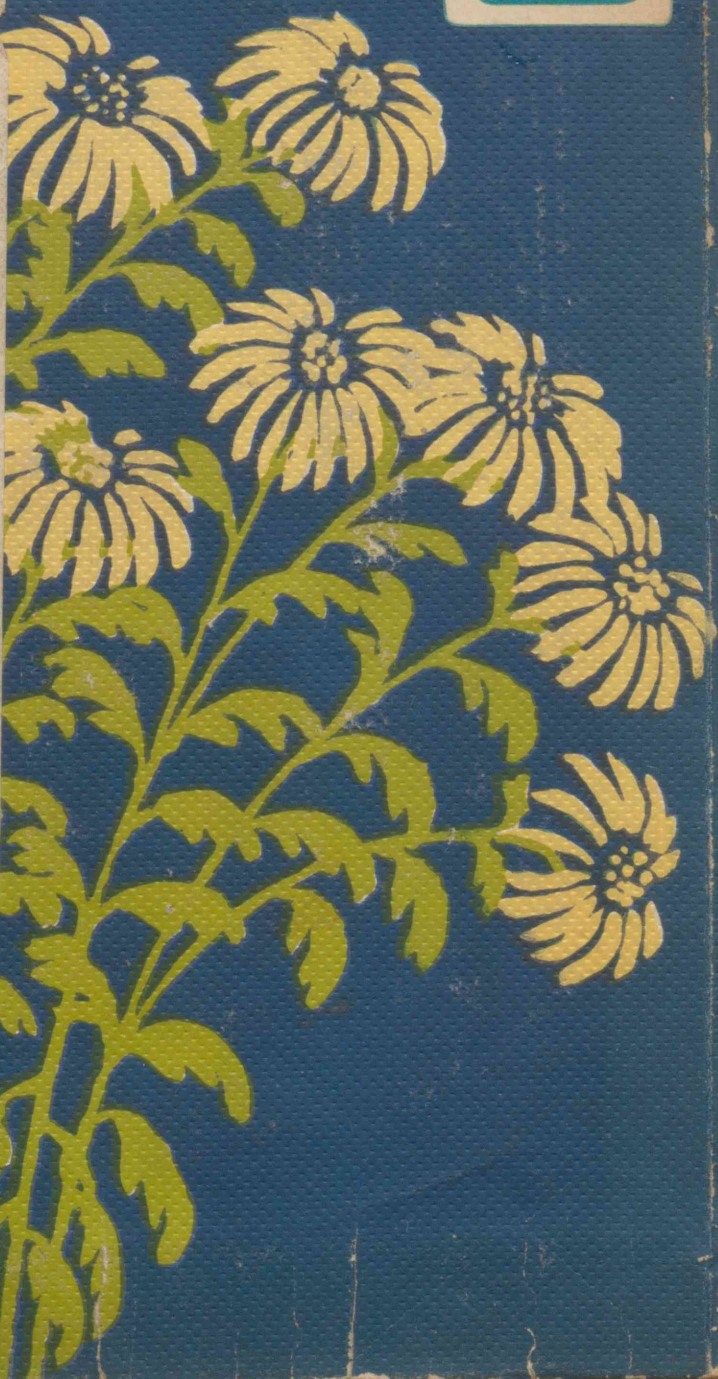


訂六女子國語讀本 卷三

375.9
Y619
資料室



Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M

42206
教科書文庫
4
810
42-1925
20003
01734



375.9
Y119

大正四十二年二月十八日
文部省檢定
高等女子學校國語教科書

廣島女子國語讀本卷三



吉田彌平 篠田利英
小島政吉 岡田正美
共編

金港堂書籍株式會社

訂六 女子國語讀本卷三

目次

| | | | |
|---|-----------|-------|---|
| 一 | 千里の春 | 大和田建樹 | 一 |
| 二 | 皇太子殿下の御幼時 | 石井國次 | 八 |
| 三 | 渡舟 | 坪内雄藏 | 七 |
| 四 | 田舎より | 藤岡作太郎 | 九 |
| 五 | 朝の庭 | 高濱虚子 | 三 |
| 六 | 老僧の接木 | 室鳩巢 | 六 |
| 七 | 人の一生 | | 六 |
| 八 | 潮の岬 | 杉村廣太郎 | 元 |

目次

| | | | |
|----|------|-------|----|
| 九 | 難破船 | 相馬御風 | 三 |
| 一〇 | 夕雲雀 | 三輪眞佐子 | 四 |
| 一一 | 紅蘭女史 | 藤代禎輔 | 四 |
| 一二 | 杜鵑 | 中邨秋香 | 五〇 |
| 一三 | 桶峽 | 若林欽 | 五〇 |
| 一四 | 珊瑚礁 | 武島羽衣 | 五 |
| 一五 | 南洋 | 徳富健次郎 | 七 |
| 一六 | 漁村 | 田山花袋 | 七 |
| 一七 | わが故郷 | 幸田露伴 | 七 |
| 一八 | 夏 | | |
| 一九 | 雜草 | | |

評駁

| | | | |
|----|-----------|-------|-----|
| 二〇 | 故郷の山 | 三宅やす子 | 六 |
| 二一 | 夏の京 | 近松秋江 | 六 |
| 二二 | 水の都 | 高安月郊 | 六 |
| 二三 | 富士登山 | 萩原井泉水 | 六 |
| 二四 | 蜀山人の盆燈籠 | 饗庭篁村 | 一七 |
| 二五 | 禮者 | 太田蜀山人 | 一三 |
| 二六 | 大石良雄と忠僕八介 | 藤岡作太郎 | 一四 |
| 二七 | 飛驒の山中より | 遅塚麗水 | 一六 |
| 二八 | 螢 | 吉田絃二郎 | 一三 |
| 二九 | 漢字の音 | 芳賀矢一 | 一四〇 |
| 三〇 | 國民性 | | |

| | | | |
|----|-------|------|----|
| 三〇 | 蟲の音 | 沼波瓊音 | 一〇 |
| 三一 | 松平信綱 | 新井白石 | 一〇 |
| 三二 | 美濃の隱家 | 岸上質軒 | 一五 |
| 三三 | 銀杏樹 | 水野葉舟 | 一五 |
| 三四 | | | |
| 三五 | | | |
| 三六 | | | |
| 三七 | | | |
| 三八 | | | |
| 三九 | | | |
| 四〇 | | | |



六訂女子國語讀本卷三

國文學者、歌人。
明治四十三年歿す。

品川の臺場。
所子よりのためと
しらへE所を
産生場といひ

一 千里の春

大和田建樹

春晴千里、山青く、水緑なり。此の間に一線を引行くものは何ぞ。一列の汽車、今や、東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出すは、歌か、詩か、抑、畫か。

七砲臺の邊、波穩かにして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。帆を半ば張りて出で行く舟あり。櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、探れども

一 千里の春

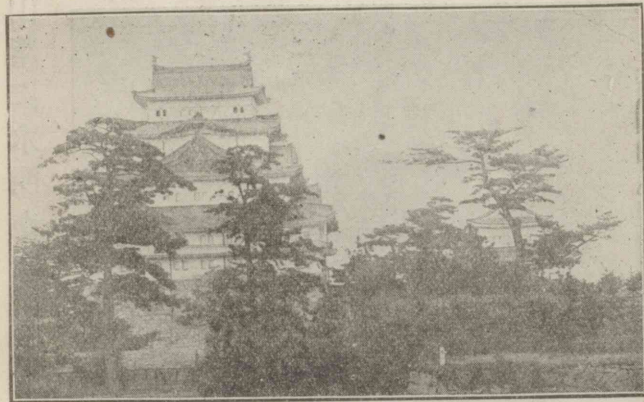
一

見えず。松青き處、彩り添ふるに桃の紅なるを以てす。自然の配合妙なるかな。藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。

富士山は水彩畫の如くにして、窓の右に立ち、又、左に見はる。三保の松原煙りわたりて、夢の如く淡し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造化の妙技にモトあるものかありませぬか何ものか造化の妙技に漏れん。何ものか造化に産み出たものか近き舟は行けども、遠き帆は動かんともせず。杳として認められたるは、伊豆なるべし。

平原十里、麥は綠に、菜の花は黄なり。熱田の社を右に見て春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。田夫は金の鯨を指して妻と語り、行商は旅宿の可否

を評して、我が好む方へと人を勧む。



名 古 屋 城

彦根去り、草津來り、煙は早くも勢多川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡今何れの處ぞ。問へども答へず。霞に疊まる、遠近の山、或は淡く、或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、粟津の松風獨り昔に似たり。東寺の塔は陸まじく我を迎へて立ち、鴨川の水は懐かしく我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ひ、懐かしき友と語るに似た

木曾義仲。

二 鳩の海とも云ふ。琵琶湖の異名。

るは、我が京都に着ける時のいつもの心地なり。山紫に水明かなる處、たゞ夢の如く、現の如く、三條を渡り四

條を渡ること、日に幾たびぞ。

躑躅を柴に折添へて、戴き連れ

たる大原女も、いつしか我が友

となれるが如し。如意嶽より

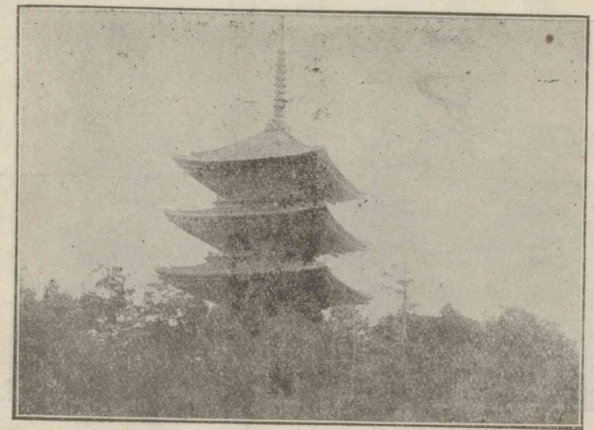
吹來る春風は、軽く我が袖を拂

ひ去る。

類なき晴天は、日々老若男女を

誘ひて、西へ東へと群れ行かし

む。さしつゝきたる日傘は、橋の欄干とともに水に影を落



東寺の塔

せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音堂の前を満せり。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、恰も一幅の四條畫を展べたるが如きに、姥は此の間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。暫し休みて、眺め渡せば、淺黄に、藍に、霞み渡れる八幡山崎のあたりも、面白きに、東寺の塔を松の木の間、に墨書きにせる筆こそは、殊に巧なれ。



清水觀音堂

*四條派の畫。圓山應舉の門人松村吳春此の派を開く。

*仁和寺をいふ。

西山の花みる人は多く先づ御室を指す。松青く、樓門赤く、

茶煙絶えつゝに揚りて、花極めて白

し。塔は霞を漏れて松風の外に聳

え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包

まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の聲

長へに高き梢にあり。

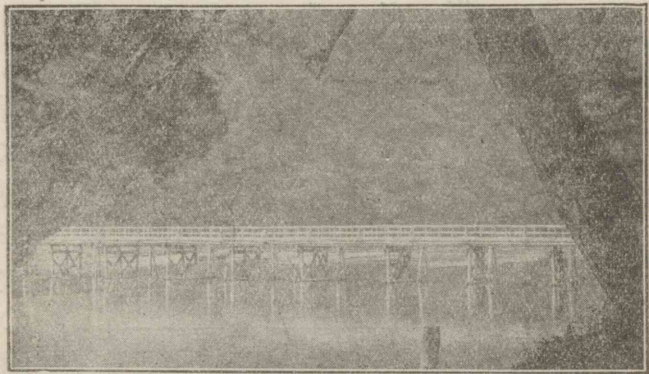
山 重なる岩根を踏みしめて生ひ立つ

松、其の間を點綴して咲き誇れる花、

嵐山の春こそは今闌なれ。小舟に

乗りて漕ぎ行く人あり。岸の此方

に眺むる人あり。渡月橋を渡れば嵐山の麓なり。大堰川



(一) 京都西陣で織出す
西陣織。
(二) 友禪といふ者の工
夫し出したといふ
華麗な染模様。

に沿ひて廻り、坂を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげら
るゝ一幅の圖、柳・櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出せるが如
く、又、友禪を染めなせるが如し。途に、太秦を過ぎて廣隆寺
を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶
店あれども、客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童
は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山を籠め、叡山を縈りて、やうく鴨川に襲ひ來れ
り。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ。

紫に、紅に、藍に、墨に、彩られ行く山影、淡く、濃く、青く、黒く、消さ
れゆく人影、詩中のものならぬは無し。天地たゞ平和、四望
たゞ寂寞。顧みれば、西山も無く、北山も有らず。(雪月花)

*
教育家。
學習院教授。

二 皇太子殿下の御幼時 石* 井 國 次

皇太子殿下の御令徳多くおはす中にも、第一に驚き奉るは、御記憶の拔群にあらせられることであります。今まで多くの生徒に接して参りましたが、殿下のやうに御記憶の強い方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無い事まで、一度御覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。

此の御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもよい加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歴

史で聖徳太子の事を申上げると、御歸りになつて参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、盛に御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申上げれば、種々の器械を御取寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣味も豊富に入らせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、其處の産物や動物、礦物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事が斯ういふ風であらせられ

るから、御知識が確實で且深みがあらせられる事は實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に参拜して明治天皇の日常御使用になつた御調

度品を拜觀したものは、誰で

も其の御質素なのに感泣し

ないものは無いと思ひます

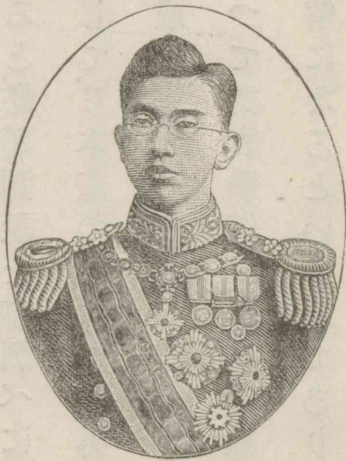
が、殿下も亦其の御遺傳のた

めか、御感化のためか、御生來

贅澤が御嫌ひで入らせられます。それですから御學用品

等も、全く一般學生と同様なものを御用ひあそばされ、鉛筆

などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使ひになり、而も



皇太子殿下

それが非常に短くなるまで、決して御棄てになりません。

消ゴムも當時四五錢位のを、豆粒位になるまで御使用

になり、御帳面でも半紙や畫用紙でも、決して無駄には遊ば

しませんでした。それで大正三年三月殿下が初等科を御

卒業あらせらるゝや、此の殿下の御高德を一般兒童に知ら

しめたならば國民教育に裨益する所があるだらうと考へ

て、殿下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛

筆、ゴム、其の他殿下が御製作になつた手工品、圖畫標本等を

拜借して、一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、

一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあ

ります。其の時、毎日何千といふ兒童が校長、教員につれら

れて参り、私共は手別けをして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子でかなり綺麗な服装をして幅の廣いリボンなどを着けて来た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、皆さんは殿下さへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりが出来ないでせうね。」といつたら、感激して大分泣いた生徒がありました。

殿下は又非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜御食事御通學御復習御運動御入湯御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつ

て、御變更になる事は容易にありません。従つて色々の事を遊ばすにも、總べて規律正しい計畫を立て、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。殿下は例へば戦爭ごつこをやつたあとで、私が其の審判をし、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利な事であつても決して隠す所なく御申出になる。角力で殿下が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣が付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、是は私に踏切があつたから負であります。」と御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な裁判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の

者が、其の方が都合が好いではありませんか。などと申すと、
「そんな不正直な事はいけない。」と仰せになる。御判断に決
して私心を挟まれない。それであるから、歴史上の事柄を
御批判なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局か
ら斷案を下し給ふ。實に殿下の御心はさながら少しの曇
もない明鏡であらせられます。それゆゑ、殿下の御心鏡の
前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと寫し出されて、隠
すことが出來ないのであります。

殿下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の
少い方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやりの深
い御方であらせられる。従つて御幼少の時分から、普通の

子供に有りがちの、友達をいぢめるとか、意地わるい事をな
さるといふやうなことは決してありませんでした。そし
て友達に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふこ
とが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従
や侍従武官などに對しても、新舊の區別なしに優しく御接
しになるさうです。而も舊いものを何時までも御忘れに
ならず、元の侍女だの御學友だのが御伺ひ申すと、大變に
御喜になりますし、時々の御召もあります。私どもにも無
論其の通りで、御誕辰其の他の御祝には、屹度御召があり、御
機嫌伺に出れば御喜になつて、特別に拜謁を許され、御暇の
時は何時までも御引止めになつてお話下されるのであり

ます。先年御外遊の時には、私は、ロンドンやパリで御迎へへ申上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも先生々と仰せられるので、覺えず身の光榮に感泣した次第であります。これは實に教育者の天職に對する無上の光榮であります。人心がだんく荒んで、師恩を忘れるどころか、全く念頭に無いやうな青年學生の多い今日、殿下のなされ方は實によい模範ではありませんか。

殿下の御盛徳を稱へ奉ると、まだ澤山にありますが、要するに殿下は御天性實に間然する所の無い立派な御方で、まことに神々しい御性質を御生れながらにしてもつていらつしやると申し奉るほかはありません。(教育研究)

三 渡舟

坪内 雄 藏

*
逍遙と號す。
文學者。
早稻田大學名譽教授。

しだれ柳の影ひたす、
村と村とのさかひ川、
波があや織る土手際に、
今日も人待つ渡守。

雨の日、風の夜、朝夕に、
渡呼びつゝ來る人は
旅あきうどや、村の爺

町の女房、役場員、
 竿かたげたる魚釣や、
 獵犬つれたる若紳士、
 西國巡禮角兵衛獅子、
 郵便配達小荷駄馬。
 なりも言葉もいろくが、
 暫し乗合ふ舟の中、
 知るも知らぬも知りあうて、
 かたる間もなく向岸、
 思ひくにおりたちて、
 西へ東へわかれゆく。

往くを送れば、また来る。
 相手は日々にかはれども、
 かはらぬ流、同じぬし。
 岸の青柳、水の月、
 波間の鳥もなじみにて、
 春秋いくつ重ぬらん。
 藤岡作太郎
 四田舎より
 拜啓。その後、御起居如何に候か。昨秋一家舉つてこの
 地に移り候ひてより、往來する友もなく、日々一里の道を

*國文學者。
 文學博士。
 東京帝國大學文科
 大學助教授。
 明治四十三年歿
 す。

學校に通ふのみにて候ひしが、この頃の春の景色に、おのづから心も浮き立ち候へば、學校の休日毎に、弟妹と共に田野の間を歩き廻り、例の水彩畫をも試み候。最近のもの一枚、小包郵便にて御送り申上候間、御笑覽下され度候。畫面の内、小川の傍に高き松の聳えたる、その下の藁屋が私共の住居に候。土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候。川の堤の様々の色うるはしきは、若草の中に葦、蒲公英、蓮華草などの咲亂れたるにて候。その中には土筆も多く生じ、妹などは時々前垂に一杯にして歸り候。堤のあなたの緑の色濃きは、麥畠に候が、まだ穂は出でず候。黄色なるは菜の花の咲満ちたるにて、舞ひ居る蝶を招き居り

候。

この頃は、野にも畑にも一面に、火鉢の上に火氣の昇るが如くちらくくと動くもの見え候。この陽炎のみは、晝には書け申さず候。又、雲雀も空高く揚り居り候へども、これも亦晝中には入らず、残念に候。青天に一點の塵と見るほど小さく、聲ばかり大きなるが、やがてふつと啼止みて、逆落しに麥畠のうちに落ち候。山陰の藪には、今も、鶯囀り居り候。この邊にては、夏の頃までも、かやうに啼續くるよしに候。都の友の消息ゆかしく、上野・日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下され度候。草々。

*名は清
俳人。
小説家。
鎌倉に住む。

五 朝の庭

*高濱 虚子

萩の若葉の心の處に油蟲が付いて居る。又其に蟻が群がつて居る。よく見ると油蟲は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其の上を無造作に這つて居る。是は結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體己れをどうする積りだと言つたやうに、痒さうに首筋をもたげてじつとしてゐる。

其の萩の下に蟻が塔を作りつゝある。昨日の雨が大地をぼこ／＼柔かくして居る。其の土を山のやうに積み上げて居る。幾匹とも數知れぬ蟻が其の山の上を右往左往に

さまよつて居る。五六匹の蟻は、頭を突き合して何か談合してゐる様子であつたが、慌しく連立つて巢の中に這入る。又連立つて巢の中から出て來る。

何處やらに蠅の唸る聲が聞える。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年今頃になると、此の菌が生える。白い小さい菌で、一緒に十ばかりもかたまつて生えて居る。又芝生には小さい草花が生えて居る。其は斯うやつて芝生にしゃがんで居ると、始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい蒼が咲いて居る。小さいと言へば、芝の尖に一つ／＼宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳や下駄を濡すのは此の露である。

それよりも愈こ小さいのは、菌の傘の端に宿つて居る露である。傘の端がぎざぎざくになつてゐる其の一つの尖にある露である。

白い蝶が三匹もつれて、松の樹の向ふに飛んでゐる。

睡蓮の荅が少し締りを緩めて居る。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の庭の松の樹をも靄が包んで居る。

芝生に様々の蟲があるのに氣が付く。其の中に小さいばつたが居る。是は赤ん坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹

の蠅が目にとまる。是は今やつと生れ出た儘であらう。羽が極めて奇麗で、全體が薄紫色をして居る。其に二つの黒い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

睡蓮の荅を覗き込む。芭蕉の雫が襟元に落ちる。熱帯の病を此の雫が持つて來たやうな心持がして、ぞつとする。

睡蓮の荅は少し口を開けかけて居る。其の中に黄色い蕊がほのめいて見える。青梅が三つ圓くなつてゐるのが目立つ。其の他にもなつてゐるのであらうが、青葉がくれに見えぬ。

二番電車が通る。(朝の庭)

六 老僧の接木

室

鳩

巢

名は直清。漢學者。徳川幕府の儒官。享保十九年歿す。東京上野公園の西北。もと多く寺院に給せられた地。

徳川家光。

谷中の里に、何がしの院といふ眞言寺あり。我、幼かりし時、その住僧を知りて、屢、寺に行きて、木の實拾ひなどして遊びしが、住僧、傍の人に向ひて、前住のことを語りしを聞きしことあり。寛永の頃とかや、將軍家谷中あたり御鷹狩の節、御徒步にて、此處彼處御過ぎがてに御覽まし、けるが、この寺へも、圖らず立寄られしに、折節、その時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて自ら接木して居けるが、御伴の人々は後れて、御側には二人三人扈從せるのみなりしを、さる貴き御

方とは思ひもよらねば、そのまゝ背き居たりしを、坊主何事するぞ。と仰せられしかば、老僧心に怪しと思ひて、いとはしたなく、接木するよ。と御答申し、かば、御笑ありて、老僧が年にて、今接木したりとも、その樹の大きくなるまでの命も知り難し。それに左様に心を盡すこと不用なるぞ。と上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なき事をいひ給ふぞ。よく思ひて見たまへ。今この樹どもつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きく生ひ立つべし。然らば、林も茂り寺も幽ならんと、我は寺の爲を思ひてすることなり。あながちに人一代に限るべきことかは。といひしを聞かれて、老僧が申すこそ、實にも理なれ。と感ぜられけり。そ

の程に、御供の人々おひおひ來りつゝ、御紋の物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大いに恐れて奥へ遁げ入りしを、召出されて物など賜ひきとぞ。(駿臺雜誌)

七 人の一生

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし、急ぐべからず。不自由を常と思へば、不足なし。心に望起らば、困窮したるときを思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つことばかり知つて、負くることを知らざれば、害其の身に至る。己れを責めて、人を責むるなかれ。及ばざるは過ぎたるよりまされり。

(傳教的)

*東照宮御遺訓として世に傳へられたもの。

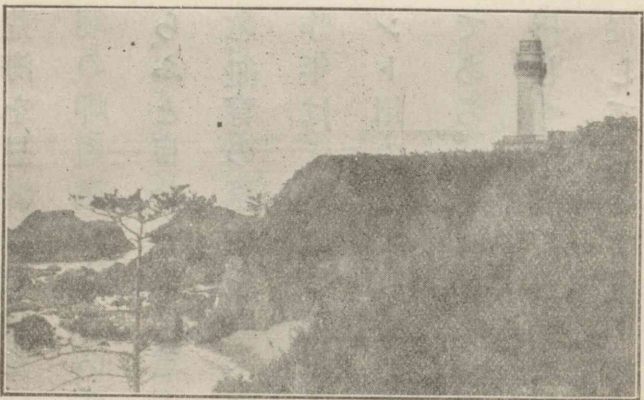
八 潮の岬

杉村 廣太郎

とかくして、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間に薊蒲公英が咲いてゐる。背を屈めたやうな磯馴松がぼつりくと處處に立つて居て、それに繋がれた牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が、此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲が遠くで聞える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、地骨あらはになつた巖が

(一) 紀伊の南端の岬。
(二) 楚人冠と號す。東京朝日新聞記者。

幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどうくくと、寄せては返し、返しては寄せしてゐる。余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。打開けた太平洋の海面、雲煙渺茫として、其の果は何處とも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニヤを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて北亞米利加カリフォルニア州のロスアンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が即ち日本と世界との接觸する處なのだから、面白い。



湖の岬の燈の臺

まづ、此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに、海軍の望樓に至つては、夜となく、日となく、苟も此の下に船の影さへ見えると、内外いづれの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた湖の岬の人々として、其の中から濠

明治四十二年。

洲や米國に出稼する者の多く出て來たのも無理はない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國とも心得てゐるだらう。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だなどと考へながら、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の廿二日、去年は愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乗出さうとした日、一昨年は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、セント州の櫻桃、杏梨の今を盛と咲亂れた中を走つてゐたのである。

折しも、望樓で頻りに信號旗を揚げる。それとばかり友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てゝある望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ、下げよ、と忙しげに指揮し

てゐる。隣の無線電信局では、ばちくくくとけたゝましい音を立てゝ、電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の「淀」が行く。(へちまのかは)

九 難破船

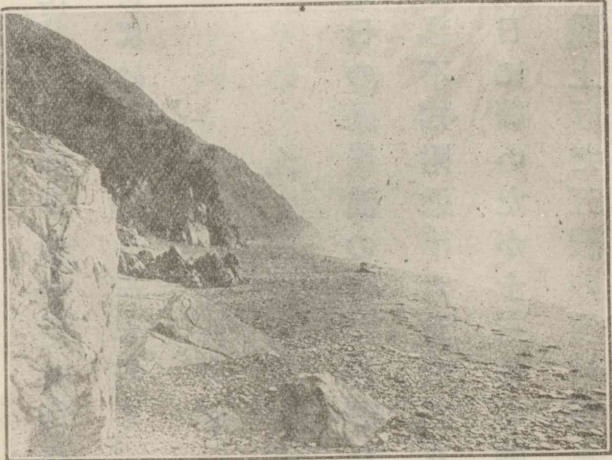
相馬御風

名は昌治。文學者。

大正六年。

先日の暴風浪シケの時に起つた事件である。場所はあの有名な親不知附近。六月十二日の夕方から起つた大荒は翌十三日に續いたが、十三日の朝九時頃になつて、親不知東海岸へ乗上げた五艘の漁船があつた。何れも越中宮崎村の漁船であつたが、幸ひ乗手は皆生命に別狀は無かつた。併し

彼等は皆暫くは起つことが出来ない程に疲れもし、餓ゑも



越後親不知の險

して居た。處が彼等が救助されてから間もなく、又しても一艘の小形漁船がその濱へ漂流して來た。今度のは小さいのと、乗手が僅かに二人ほか無いのと、しかも其の二人が極度の疲勞に達してゐるらしいのと、爲にとても彼等自身の力で、岸近くまで乗上げることが出来ない様に見えた。それで附近の村

民は、大擧して其の哀れな漂流船一艘を助けようと集り騒いだけれども、荒狂ふ大浪に氣を吞まれて、たゞ徒に騒ぎ廻るだけで、誰一人波をくゞつて救助に向はうとするものになかつた。

しかも漂流しつゝある二人の漁師の命は、刻々に危険に瀕するばかりであつた。折も折、突如として彼等の間へ割込んで來て、その役目を自分に任せてくれと申し出た二人の男があつた。見るとそれは數刻前に救ひ上げられた越中の漁師であつた。その二人は年はまだ若く、身體も頗る丈夫さうに見えたのであるが、何を云ふにも、つい今の今まで綿の様に疲れて寢て居た人たちである。人々は一時は喜

びはしたものの、しかしひどく危まないでは居られなかつた。二人は云つた、私達は、どうせ死ぬものと覺悟して居た命を、かうして助けて貰つたのだから、死んだつもりで飛込んで見よう。漁師は相見互だ。この場合に黙つて見て居ては濟まぬ。」

そして二人は咄嗟の間に救助船に乗込んで、すさまじい怒濤の中に分入つた。しかし、不幸にも、その瞬間、かの漂流船は重なり來つた大浪に吞まれて、見る間に姿を没してしまひ、折角奮ひ起つた二人の苦しい努力も、遂に水泡に歸してしまつた。

二人の努力は、かくして遂にその甲斐が無かつた。しかし、

彼等の示した美しい同情と勇氣とは、人々の胸に深い感銘を與へた。これこそ眞の同情だ、これこそ眞の犠牲的行爲だ。そして其の勇氣と力とは何と云ふ美しさであらう。今にも死にさうにまで疲れ切つて居た體のどこから、それほど勇氣と力とが出たのだらう。不思議な勇氣だ、不思議な力だ。多數の疲れない丈夫な人達の中から遂に涌起らないで、綿の様に疲れて居た人達の中から、突如として涌起つた其の勇氣と力とは、何といふ崇高な表現だらう。私は此の話を聞いた時に、幾度か感歎の聲を繰返さないうで居られなかつた。そして更にさうした感激がやゝ永く續いた後で、私はその二人の漁師だとして、恐らく平常は一向

つまらない人達なのであらう。しかも機會に遭遇すれば、突如として彼等の内部からさうした崇高な同情と勇氣と力とが涌上つて来る。人間そのもの、奥底に潜んで居る尊さがあらはれるのである。何れにしても驚くべき事實だ、崇高な事實だ。と思つた。

私自身としては、彼等の如き單純に生きる人達の生活の上に、時あつて表現される善良なもの、美しいもの、感化を出来るだけ私自身の魂に受入れ得ることをより多く希求してゐる。他人の救よりも寧ろ自分自らの救を求めるのである。(樹かげ)

一〇 夕雲雀

三條西季知

芝生には何時おち來らん夕雲雀

なほ空たかく聲のきこゆる。

木下幸文

鶯の來て啼く聲に起されし

あさいの夢は惜しけくもなし。

大隅言道

歸り來てねたるわらはの袂より

こぼれ出でたる花すみれかな。

小池道子

(一) 公卿華族。明治の初年歿す。

(二) 京都の歌人。文政四年歿す。

(三) 筑前の歌人。明治元年歿す。

(四) 歌人。命婦。

紀伊の歌人。
安政五年歿す。

京都の歌人。
享和元年歿す。

江戸の歌人。
賀茂真淵の門人。

主人にはいとまごひして、更にまた

垣根の花をかへりみるかな。

加納 諸平

夜をかけて昨日も見つる花ながら、

けふまた更に珍らしきかな。

小澤 蘆庵

ときぬとさなへとりといでてはて、

田中のさとは夏ぞさびしき。

土岐 筑波子

中垣のあらはなりしも、夏くれば、

はひもてかくす夕顔のはな。

女流教育家。
三輪田高等女學校

長。

美濃國安八郡曾根

村の人。

幕末の詩人、勤王

一一 紅蘭女史

三輪田 眞佐子

紅蘭女史は齡十七にして詩人梁川星巖に嫁せり。居るこ
と未だ數句を越えざるに、星巖女史を顧みていふ、吾暫し近
國を漫遊せん。その間に之を讀み給へ。とて、三體詩を與へ
て、飄然として家を出でたり。女史はしばしが程と思ひし
に、待てどもく歸り來ず。秋の雁はふたゝび歸り來れど
も、何の玉章をも齎さず。春の花は三たび咲けども、訪ひく
る人の影もなし。されば、離別せよ。など勸むるものもあり
しかど、女史は拒みて肯はず、日々機によりて布を織りつゝ
三體詩を誦しけり。

三年を経たる秋星巖家に歸りて、かの詩は少しは讀みたりや。と問ふに、女史、一句をも誤らで誦しけり。この後女史は益書を讀み詩歌を學びて怠らざりければ、夫と共に四方を歴遊して、名聲大いに揚れり。女史は才學に秀でたるのみならず、裁縫のわざをはじめとして家政の道にも精しかりき。書畫は頗る巧なれども、多くは「鍼線餘事」と刻める印を用ひたり。これ文人墨客を以て自ら居らざるしるしなるべし。良人は勤王家なりければ、國事に關する書類はいと多かりけるが、女史は豫め幕府の意を知りて、良人に謀りて之を烟となしぬ。その後果して吏來りてその家を搜索せしかど、

何の證跡をも得ること能はざりき。あはれ、かゝる婦人こそまことに能く良人を輔佐すとはいふべけれ。

女史嘗て良人より黄金數箇を得て、永く囊中に藏めて、こよなき寶となしぬ。あはれに優しき情なりけり。女史は又、琴に熟達し、詩歌に和して弾じけるが、其の妙なること、梁の塵をとばし、空行く雲を遏む。といふ程なりければ、自ら良人を慰め、一家の中さながら春風の薫れるが如くなりき。

凡そ學問に長ぜる女子は濃かなる情に乏しく、和順の徳を缺けるもの多き習なるに、實に女史の如きは類稀なる婦人といふべし。

安政五年九月二日、梁川星巖翁、尊王の壮志を抱きながら、病

善ク歌フ者廣公アリ。聲ヲ發シテ梁上ノ塵ヲ動カス。
 秦箏、節ヲ撫シテ悲歌ス。聲、林木ヲ振ハシ、響、行雲ヲ遏ム。

*井伊直弼。

のために世を去りけり。この時、幕府にては井伊大老事を執り、外國と條約を結び、大に志士を捕へぬ。幕吏はかねて星巖を目指したりしかば、やがてその妻紅蘭を捕へたり。捕吏の來りしとき、女史は少しも騒がず、從容として家人を顧みて、「心して留守せよ」といひて、さながら隣家に行くが如く、泰然として出でゆきけり。

幕吏女史を糺問して、尊攘論者の事情を探り知らんとつとめしかど、女史は答へていはく、「吾が夫は輕々しく人に機密を洩すが如きものならねば、われは聊かも知れることなし。よし、ありとも、夫の祕密を告ぐるは妻の道にあらじ」とて、何事をも言はざりければ、吏もせんかたなくて止みぬ。

女史は今や獄中の人となれり。獄吏も流石に物のあはれをば知りたりけん、數羽の鳩を飼ひて、その無聊を慰むる事を許しぬ。女史更に紙墨を得ん事を望みけれども、許されず、唯筆と板とを與へられければ、晝は淡水もて板面に書畫を描き、夜は詩を作り、歌を詠じて、思を遣りぬ。かくて、うき月日を獄中に送ること半年近くに及びしが、高き操は益高く、心は露ばかりも汚れざりけり。

明月雲に蔽はるとも、いつかは雲晴れて、光照りそふ時なからん。女史、翌年二月十六日に至りて、赦されて再び青天白日の身となれり。

二二 杜鵑

藤代 禎輔

獨逸文學者。
文學博士。
京都帝國大學教
授。
頭光といふ狂歌師
の作。

作又
平通の水邊
人物、指寫
名
はかの
長所と短所
をくらひ癖

東京の西北郊

ほとゝぎす自由自在に聞く里は、
酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。
といふ歌は、子供の時分に聞覚えたもので、杜鵑は中々聴く
機會のすくないものだと思つて居た。「てつべんかけたか」
といふ啼聲だといふことも、早くから人に聞いては居たが、
本物の聲を聞いたことは一度もない、どうかして聞いて見
たいものだ、と豫てあこがれて居た。東京へ出てから親戚
の別荘が巢鴨に在つて、其處では、折々杜鵑が聞けると云ふ
ので、三月ばかり、其の別荘に住まはせて貰つたこともある
が、たうとう望が遂げられなかつた。其の後萬葉集を讀ん

ほとゝぎす
時食
不如歸
杜宇
子規
郭公
死出う

*京都の北一乗寺か
ら比叡山に登る
道。

で見ると、晝は終日、夜は徹宵、杜鵑が來啼きとよもすと云ふ
歌の文句が、頻りに目に附く。昔はそんなに杜鵑が多かつ
たものかしら、歌人の大袈裟な表現ではあるまいかと、半信
半疑であつた。
京都へ來てからは、こゝかしこに杜鵑の名所があるやうに
聞いた。嵯峨の小倉山邊では、晝でも杜鵑が啼いて居ると
いふ話だ。けれども、未だ一度も行く機會が無かつた。と
ころが四月半ばに、叡山へ上つた時、雲母越の途中から道連
れになつた叡山通の話に、初夏の新緑の頃既望後の月夜に、
杜鵑を聴きながら上るのが、興の深いものだ、と聞いて、宿願
成就の時節到來と、心中歡呼の聲を揚ぐるを禁じ得なかつ

此叡山の頂上。

た。そこで大正二年五月二十三日、陰曆十八日の夜、雲母越を四明が嶽に上ることゝ一決した。頂上に達する頃、夜の白々と明ける景色がいふにいはれず美しいと聞いて居るから、午前一時半頃結束して、同行二人、犬を連れて出發した。月影は穩かな灰白い光で、一帶の山野を覆ひ、東山のふつくりした寢姿、叡山のどつしりした雄姿が、はつきりと眼に映じる。一乗寺村を通ると、人家は盡く寢靜まつて、折々犬の遠吼を聞くのみであるが、かゝる田舎の茅屋にまで引いてある電燈の火影は、戸の隙間から外へ洩れて居る。愈、雲母阪に掛ると、左右から覆ひ被さつた木の下闇に、鼻を撮まれても分らないほどである。何遍か此の阪を往き來したこ

とのあるベスも、今夜ばかりは心細いと見えて、悲しさうな聲を出して、頻に足許に纏はる。晝間でも随分骨の折れる阪を、眞の闇に登るのであるから、折々石に躓いたり、雨落ちの窪みへ滑り込んだりしながら進むと、遙か上の方で何やら聞えた様な氣がする。杜鵑ぢやないかと、立止つて耳を立てる。後が續かないので、見當が附かぬ。或は一町も先の方に進んでゐるベスの啼き聲かとも思はれた。音羽瀧の音の聞える平坦な隘路に出ると、再び月光に浴する身となつた。一町と行かぬうちに、またも阪道に差掛る。夜陰の有難さには、露は深い、餘程涼しいので、喘ぎ、登つても汗は左程に出ぬ。二十分も経つたかと思ふ頃、愈、杜

(一) 愛知縣愛知郡有松村にある。
(二) 國文學者、歌人。宮内省御歌所寄人。
明治四十三年歿す。

鶉の聲が聞えだした。これが臍の緒切つて始めて聞いたのであるから、一生懸命に耳を澄す。成る程、てつぺんかけたか。と聞える。眞に佳い聲だ。前に記した叡山通が、遠州の山奥で見たと云つて、杜鵑が一羽、樹の枝に留つて居ると、下の枝に鶯が二羽留つてゐて、さも感心した様に杜鵑の鳴き聲を傾聽して居た。謂はゞ杜鵑は鶯の先生である。といふ様な話を聞かせた。あの聲なら、鶯の先生といはれても恥かしくはないと思つた。(文藝と人生)

三三 桶峽

天地に轟くはたゝ神

中 郵 秋 香

八田知純ノ
尾張子

(一) 尾張國愛知郡香掛村。
(二) 尾張國知多郡大高村。
(三) 尾張國愛知郡笠寺村。
(四) 尾張國西春日井郡清洲町。

篠を束ねて降る雨を
神の祐と唄づたひ、
銜を包み草摺まきて、
攻入る必死の三千騎。

杳懸大高笠寺の

野にも山にも満ちくゝたる

四萬五千の駿河の軍勢。

明日は清洲を攻め落し、

決河破竹のいきほひにて、

尾張の國を定めんと、

心驕りの酒うたげ。

「松の嵐は琴のしらべ、」

鳴神のおとは鼓のひびき、

よに心地よきうたげや。」と

佩きつる太刀の緒打解けて、

歌ひつ舞ひつ、もろともに

興たけなはなる折しもあれ、

四面に起る関の聲。

すは敵ぞといはせもあへず、

雨よりしげき寄手の槍先、

嵐をしまく敵の太刀風。

天たちまち覆り、地みるく裂け、

きらめく稻妻光のひまに、

二千餘人の玉の緒は

草葉の露と消えにけり。

あゝ、定めなき人の世や。

あゝ、頼まれぬ人の身や。

さもいかめしく轟きし

名はとぎの間のはたゝがみ。

夢の名残の松風も

昔のあとやたづぬらん、

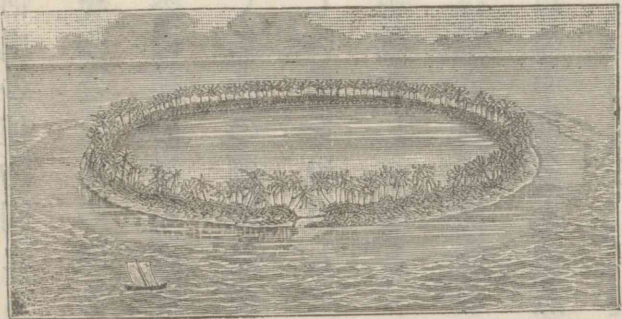
五月雨寒き桶峽。(新體詩歌集)

海軍中佐。

一四 珊瑚礁

若林 欽

予は始めて珊瑚礁を見たときに、其の奇妙な美しさに驚いた。南洋の廣い海上に於て、各島の周圍には海岸より一二海里づつ隔て、環礁がある。波が之に當つて礁上十尺以上、十五尺の水が常に迸り立ち、礁内は波が平かで、さながら防波堤を繞らした様である。水が綺麗なので、船上より海の底を精しく視ることが出来るが、海の底の全面は悉く珊



珊瑚礁を敷きつめて、各種異様の形と色とを現し、大小多くの魚族が其の間に泳いで居る。其の光景の美しさは實に言語に絶してゐる。珊瑚島は日光を受けることが強烈であるが風が絶えず吹き、珊瑚の聳えた礁の上には波が常に白い珠を降らし、日光が之に映つて時ならぬ虹を生じて、見る目が非常に愉快である。礁内に入ると、水面は鏡の如く、水の色は澄んで、さながら水晶を透して海底を見る様である。淺く見えるが、其の實

は大に深いのである。何處の植物園にも、此處の海底に見る如き奇態な、美しい、鮮やかなるものはあるまい。珊瑚礁は或は灌木の如く、或は麥の穂の如く、或は草の如く、或は鹿角の如く、或は甘藍の如く、無數の珊瑚蟲を其の上に載せ、綠紫・黃褐色又は眞白な美しい房を現出して居る。而して、其の間に大小各種の貝殻が散布して居る。殊に珍しいのは大蛤で、最も大なるものは重さ百斤に達するものがある。此の大蛤の半ば開いた口の中に多くの魚が這入つたり出たりして、平然と泳ぎまはつて居る。又、美しい鯛を始め、色々の魚が深い淵より跳り出でて、首尾相接し、愉快に、活潑に運動して、其の美麗を誇

る有様は、人目を眩ずるばかりである。

斯くて、永く海の底を瞰いて見て居ると、何人も造化の、あらゆる生物に幸福を授け給へる仁愛の心の、深く且大なるを知ると同時に、各自自己の境遇に満足しなればならない事を悟るであらう。面白い科學の話

一五 南洋

常夏の南洋にはどんなな興味があるか。まづお笑草に一つ腰折を。

ア籐を追ひ、海豚に逐はれ、我が船の

今日も亦見つスマトラの山。

歐洲行の船が新嘉坡を出て、スマトラの北岸が大陸に迫つて自然の海峡をなして居る長い間を二日に互つて進航する時の暑さはまた格別である。柴棍のことを亞細亞の小巴里とか、爪哇のことを世界の樂園とかいふのは、西洋人のお世辭でなければ、誇張である。あの暑さを考へると、護謨が幾ら儲からうと、果物が如何に旨からうと、南洋の常住は餘り望ましいものではない。只旅行者として或時期を過すには、恐らく南洋ほど多大の興趣を感じる處は他になからう。花や葉の飽くまで鮮麗な色彩、驟雨の爽快な氣分、緑陰の涌くが如き涼味などは、南洋旅行者の獨り享受し得べき賜である。

夕立の眞の趣は赤道近き熱帶地方でなければとても味ふことが出来ぬ。日本なら、行水や沛然として夕立す。位で済ましてゐられるが、南洋の驟雨と來ては眞の底抜け雨で、雨聲極めて猛烈、下界の何物をも降飛ばして了ふといふほどの豪雨である。支那では哀猿といふ熟字が詩文に用ひてゐるが、これは南方支那から來たもので、驟雨に驚いて啼叫ぶ猿を謂つたものであらう。南洋の竹は矗立數丈、鬱蒼と茂つて、所謂篁を成して居るが、一旦驟雨が襲つて來ると、親猿も子猿も幾十匹となく、きい〜と叫び續けて、竹林を登つたり下つたりする。五分もたゝぬ間に、今迄の盆を覆す程の豪雨がびたりととまる。同時に猛烈な太陽の直射が

雨にぬれた青や紅の色の一層鮮かに見える幅の廣い葉に照りつける。二分とたゝぬまに、乾き盡して、路上にも枝にも葉にも、雨の跡が露ほどもものこらない。南洋植物の景觀には、蘿葛類の壯觀と綠葉の美觀とあるが、これに彼の驟雨の襲來するときに、一番壯快であると思ふ。赤道附近の航海者が、夕立雲の見えるや否や、眞裸で手にシヤボン一つ持つて甲板へ飛出して、待つ間程なく襲ひくる急雨に、瀧でも浴びる氣になつて、頭からシヤボンをなすりつけて、手取早く雨浴を済ますのは航海者に取つて無上の樂みだ。で、天然の一浴を済まして、悠々と浴衣でも着ようとする。と、眼前に開いて居る瑠璃色の海面を銀の矢のや

にう飛んでをる飛魚の愉快げな様。誰でも詩情を起さずには居られぬ。新嘉坡の植物園や、爪哇のポイテンゾルグの植物園などは、旅人の爲に確かな樂園である。動物界からいつても、鱈や毒蛇の害は怖るべきではあるが、亦天狗猿の鼻の格好に笑を催すこともある。或種の守宮が室内や蚊帳の上に奇聲を發して初旅の者に軽い驚を與へることや、南洋蛙として特色のある牛鳴蛙が、牛のやうな太い聲で水田・河邊に鳴いて居るなども、亦旅中の新興味である。(世界を家としてに據る)

*
名は又次郎。
國文學者、詩人。

一六 漁村

*
武 島 羽 衣

松原こゆる夕風に

たく藻のけぶり靡きつゝ

さびしく暮るゝ沖のへの

小島がかげもかくれけり。

幾とせ浪に馴れけんを、

さてしも荒き磯のべに

をちを眺めて海人びとの

數もあまたにみだれたり。

折しも一人おいびとの

船まつほどのなぐさめと

わらはをみなを打集へ、

身のいにしへを語りけり。

あるは風あれ雲まよふ

空のみだれに船でして

歸るすべなき海原に

日數を経てしわびしさを。

あるは浪路の花もさく

春のうらゝに棹さして

綱手引く手もたゆきまで

幸多かりしうれしさを。

またある時は闇の夜に

潮瀬を過ぎし大ぶねの

岩にくだけてたちまちに

また沈みて失せしかなしさを。

またある時は月清み(月が清りたり)

漕出でて見れば、久方の

天にも昇るこゝちして

ひとりよ遊びしたのしさを。

わらは、萬づ忘れつゝ

翁の顔をまもりたり。

をみなもかうべうちたれて

言葉もあらず聞きほれぬ。

かくあるほどにをちかたの

けむりの沖をかきわけて

海人のよび聲かはしつゝ

こぎくる船の二つ三つ。

やがて渚にちかづけば、

集へる海人はみながらに

かたへのくゞつひきさげて

そなたさまへと走りゆく。

綱繰りよするものもあり、

網乾しわたすものもあり、

かたへに高き眞砂地に

船おしあぐるものもあり。

諸のひろもの

ハタ トコ

鱈ハタのひろもの籠かごに入れて

數かずいとさはに持ちゆくは、

このわたりなる里なかの

市のちまたにはこぶらん。

土にまみれし五つ三つ

わづかに乞ひて歸る子は、

世に住みわぶる「たらちねの

夕げのためといそぐらし。

しばしがほどに人々の

こなたかなたに行きわかれ、

さへづりあひしこわねさへ

あとなきまでになりゆけば、

おのが時ぞと夕ぐれは

つれなく告ぐる浦浪の

音を残して、あめつちを

ひとつ色にぞつゝみける。

（霓裳微吟）

一七 わが故郷 * 徳富健次郎

わが故郷は九州のほゞ真中で、海に遠い地方、幅一里長さ三里といふもつさうの底見たような谷である。どちらを向いても、雜木山がぐるりと屏風を立てまはし、その上から春は青くなり冬は白くなる遠山がちよいく顔を出して居

* 文學者。 蘆花と號す。

る。最も高いのは東に一つ孤立して居る高鞍山で、だれが天邊に乗捨てたのか、さながら鞍を置いたやう。この山が見え雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。この山が見えだすと、どんなに降つて居ても、やがて霽れる。雲がかゝるのも日が射すのも、まづ此の山が第一で、いはゞ、わが故郷の氣象臺だ。四方の山から混々と涌出る清水は集つて、村人のいはゆる大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田。その田を無理におしのけて、こゝに村が一撮み、かしこに家が二三十。北の隅にあるのが、まづこの谷の都で、町といへば町だが、戸数は千にも足りない。取出していふ程でも無いが、今に忘れ難いのは、水の清さと稲の美

しさとである。たしか東京に積出して、鮭米にするさうな。その稲葉のつや〜と青んで、のび〜と立揃つた所は、都人士に見せたい。

殊に見せたいのは、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、さをとめの白手拭がひらり〜と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れる頃の賑やかさである。それから、炎天の田の草取は、わきで見てもつらい。すると夕方、暑い、堪らぬ、といふ下から、ごろ〜鳴り出す。俄かに大氣が冷える。見ると黒雲がもう高鞍山を七分どほり呑んで居る。それがインキの散るやうに、ずうと満天に浸みひろがつて来る。稲妻がびかり。夥しい雷鳴が二つ三つ。

つめたい風がさつと吹いて來ると、やがて、大粒の雨がほつり。耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃げ延びぬ中に、光る、鳴る、降る、吹く、世の終りかと思ふ程の荒れやう。と思へば忽ちすうと明るくなる。笠おつ取つて、出て見る頃は、夕立は最早隣村へ逃げのびて、隣村はさながら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つて、東の方はまだ眞暗、雷様がごろごろ太鼓を敲いて居るが、西の方はあか〜と夕日がさして、高鞍山のてつぺんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。あゝ、涼しい。見よ、先程まで萎えしをれて居つた稻が、たつた一瞬の間に、眼も覺める程青々となつて、一二寸も伸びた様に、どこを見ても、さわ〜とさ

ざめいては露を搖り零して居る。濁り泡だつ田の水はどくどく溢れて、小鮒や鱒がやたらに畔路にはねて居る。蟲送も濟んで、初秋の風がそよ〜と稻葉に音づれるころは夜は露より明けて朝日に匂ふ稻花の美しさ。二百十日、二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、こゝにもさわ〜、そこにもさく〜、收穫のさかりになればだれを訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで靄ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が最早綺麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。

夫から水。あゝ、こんな水が縦横に市中に流れて居たら、東京もどんなによからう。わが故郷では殆ど井戸の用なしといつてよい位。四方の山から絶えず涌出る清水は縦横に小さな流をなして、鮎走る二つの川に落合ふ。どこに行つても、潺々淙々の音が聞える。夏の月夜などに、じつと聞いて居ると、實に好い。京都は水がよいといふが、自分は京都よりもよいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯する家の前の流も、乃至水車がかきまぜる田川の水も、實に氷とつめたく、玉と澄んで居る。今でも夏になると、自分は一人故郷をしのぶのである。(思出の記)

名は録彌
文學者

自然主義

一八 夏

田山花袋

夏は曇りたるより照りたるぞよき。空碧に、日の光きらゝかにかゞやきて、金をも燦さん如き日、靜かに机にむかひて書を読むも興なきにあらず。黄塵の堆き裏におのが業にいそしむも、亦自ら樂みあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつゝ、靜かに語り合ふなどいかに嬉しからん。日の暮るゝを待ちて、檐の岐阜提燈に火を點じ、縁に花蔭敷かせて團扇つかひつゝ、一家團欒の物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指さし合はん。月あらば更によし。梧桐・寒山竹の間より、研ぎすましたる鏡の如き光を仰

旅の文章

家ありは
永かきけり
夏の原

がんに、晝の暑さも忘れ果つべし。
幼き頃家に居て、垣根の杉などを手折り來て、古摺鉢に灰少し入れて、蚊をいぶしたることありき。蚊遣火は趣深きものなり。そことも知らぬ森の中に、ゆくりなく立ちのぼる蚊遣の烟、こゝにも人住めりやとなつかし。
夏の旅ことにをかし。日盛の二三時間を松並木の涼しき休茶屋にいこひつゝ、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却て長き里程を歩み得べし。田舎道の露店などに、清き水涌きいでて、素麵を冷したる、食指おのづから動く。
登山も夏の面白きものゝ一つなり。輕装して都を出で、遙

登山

*孔子東山ニ登リテ
魯ヲ小トス。太山
ニ登リテ天下ヲ小
トス。(孟子)

かに連山の蒼翠を望む、心既に蒼翠の上であり。登山の快は絶巔に登り得たる時にあり。されど絶巔に至るまでの努力も亦一快なり。あえぎぎ登るに、森盡き、草原盡き高山植物盡き、遂に岩石磊々たる處に達す。一望まことに天下を小とする思あるべし。登るべき山は、富士山を始め、木曾の御岳、駒が岳、日本アルプスの稱ある信濃の白馬岳、槍が岳、北陸の白山、立山など。なほ到る處に多し。
海もよし、山もよし。山ならば老樹深く、谿流清く、嵐氣肌を襲ふ處、海ならば絶海のほとり、怒濤天を衝く邊殊によし。七月中旬ごろより晴れたる空は、十五日乃至二十日續くべし。この照によりて、稻も其の莖をのばす。このてりとこ

夏から秋に
つづく 順

の暑さとや、緩む時、即ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻なり。
夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち霽れて美しき空顯れ、日の光射すかと思へば、白き黒き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として至る。物干竿の衣を取入るゝ間も無し。その雨量比較的に多く、地によりては河水汎濫し、鐵道不通になること往々にしてあり。
此の雨霽れて秋氣到る。残暑猶凌ぎ難けれど、樹間叢裡既に秋の聲あり。梧桐芭蕉は殊に此の聲を聞くに佳し。雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少なく、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るも此の頃なり。一閃毎に、闇の中の雲の

イヌ。(五七)

姿を明かに辨じ得る、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹きわたる。(花袋小品)

一九 雑草

幸田露伴

*名は成行。
文學者。
文學博士。

雑草の序

(要報)

雑草といふものこそおそろしきものなれ。之を蹂みにじり、之を刈薙ぎ、之を拔棄て、之を焼拂ひても、終にほろびうせたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我が世顔に生ひしげりて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひのけ、民の命と頼む稻麥をも虐げて、おのれのみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば、園守・田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ち其の咎を得て、花は色なく、穀はみのらざるに至る。

雑草は互
リト人
かたは情と
(手取)

*作家。
批評家。
京都市富小路竹屋
町に生る。

されば世に若し雑草といふものなからば、能く勤むる者も
惰る者も、一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は、皆同じ報を
得べきに、これありて勤むるものは佳報を得、惰るものは悪
果を得。雑草は人間の怠惰を警むる造化の鞭にやあらん
と、おそろし。(潮待ち草)

二〇 故郷の山

*三宅 やす子

私が生れ故郷の京都を離れたのは、十歳に満たぬ頃であつ
た。

話に聞く東京といふ處其處は恐しく女が威張る處だと聞
かされてゐた。まご／＼してゐると、突飛ばされる様な氣
早な處だと話した人もあつた。

「そんな處に行くのは、私怖い。」

そんなことを云つて、移住の日を嫌つて居たのであつたが、
家の都合で或夏一家を纏めて東上することになつた。見
送の人が大勢來た。

其の中の一人が持つて來た大きな枇杷の籠の傍で、私は汽
車が出て琵琶湖のあたりに來るまで、腰掛に顔を埋めて泣
いてゐた。

「京都が戀しい。見捨てた今までの家が戀しい。」

さう云つて泣いて離れた京都の町を、私はそれから幾年見
なかつたらう。

*明治四十三年理學
博士三宅恒方に嫁
す。

小學時代から女學校時代、やがて家庭^{*}を持つて、様々の世の
憂さ喜ばしさを噛みしめた今日まで、

「二度行つて見たい。」

と度々口にしながら、私は遂になつかしい地を踏む時を持
たなかつた。

が、末の兒が少し手離れかけた或年、私達は、

「今年こそ。」

と計畫して居たところ、それは旅の支度も整へかけた出發
の四五日前から、私が急に病氣になつたのでやめになつた。
「春になつたらよくなるだらう。そしたら其の時こそ家
族連立つて。」

と久しくすることの出来なかつた、少しの長い旅行に上れ
るだらうと云ふ楽しみもあつた。

そんな事を考へて居た春に先立つて、今度は子等の父を失
つた。

又一年が早く旋つた。

「今年はね。」

今度は、待ちあぐんだ長女が云ひ出した。

「行きませう。」

私は思ひ定めた。そして旅の心づもりをした。

ところが人が知らせてくれたには、

「今年は博覽會で、汽車が込んで大變です。秋に延した方

がよいでせう。」

苦みに旅に行くのはいやであつたので、又此の春の京都行は延された。

「また」と長女が力を落した。

けれども、實際力を落したのは私であつた。

たつた是だけの豫定さへ、色々の事情の爲に實行しがたいと云ふ事が、堪らなく私に果敢なさを教へてくれた。

ところが偶然に、或用事の爲に、私は極僅かの日數を京阪で暮す事になつた。

全く豫定を離れて、偶然の機會が、私をあの長い間思ひ離れた事のない故郷の上に親しませてくれるかと思ふと、不思議

議のやうに思はれる。

私は子供等を置いて、只一人、生れてから始めての單身の旅、そして又人の母となつてから始めての長い旅行をした。

夜東京を立つと、すぐ眠つてしまつた。朝になつて間もなく琵琶湖が眼の前に見え出した。

四邊の風景が、全く關東のと違つて日本畫の様である。

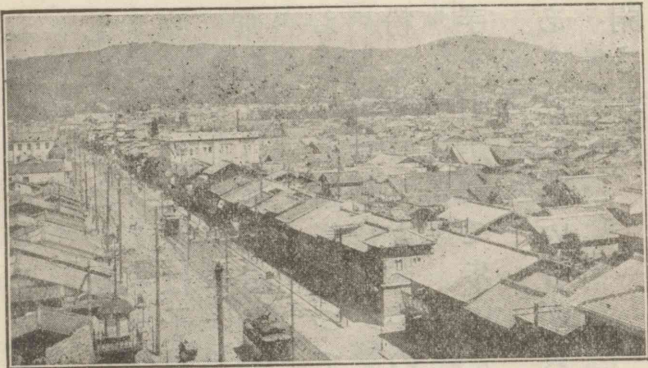
私はふと、二十年前に、此處を東へくと横ぎる汽車の中で泣いて居た自分を思ひ浮べた。

凡てはたゞ夢のやうである。

「東京はこはい處どつせ」と人が言つた。

其のこはい東京へ來て見たら、思つた程のことは無かつた

ので、安心したのであつた。
私は、東京はこはいと思つて泣いて京都の町を離れたあの
純な、初心な、自分の姿、自分の心がたまらなく懐しかった。
美しい夢ばかり、美しい世界ばかりに身を浸して、世の塵一
つも染んでゐなかつたあの頃が、甚だ戀しくなつた。
汽車が七條のステーションに着くと、此の思は一層高めら
れた。
人々の静かな表情も、堪らなく懐かしい思をそゝつた。
のんびりした幾つかの眼に見送られて、私は宿へ行く車の上
から町を見た。
もつと廣いと思つて居た町の幅は狭かつた。



四條通よ東山を望む

何處にも見覚えがあるつもりで居た町の中には、電車が何
臺も走つて居た、さつぱり方角もつ
かなかつた。
辻々に見る町の名札は、私にかすか
に古い様々の記憶を呼び起してく
れるけれども、皆其の古い繪卷とは
かけ離れた一つの町一つの辻であ
つた。
なつかしさと物足りなさが同時に
私の胸に満ちた。だが、私にひしと
強い感じを與へてくれたのは、町に近く聳えた——と云ふ

にはあまりに低いけれども——東山であつた。
私は東山を見ると、何故とも知らず涙が一杯になる。懐かしいのであつた。只懐かしいのであつた。

京に育つた私は、子供の頃から東山が一番すきであつた。
飛びくりに自分の姿が様々に浮ぶ。

おたばこ盆に結つて、緋鹿の子を掛けた私の木履姿。お白粉を塗つて大文字の灯を待つて居た友の家での宵。父に手を引かれて歩いた山の麓。

あまりに遠い昔が、只此の山を見た瞬間にすぐ眼の前に展開された。

其の頃私を掌の中の寶のやうに愛してくれた父は、世に亡

*
毎年八月十六日に
如意ヶ嶽にともす
大の字の灯。

い人となつてからもう年も久しい。が、私には、其の時の父の慈顔がはつきり思ひ浮べられるのであつた。

「故郷の山。」

何といふ懐かしい響であらう。

町は建物によつて變化し、人は絶えず老いて行つて定まらぬのに、そして愛する人は、多く愛するものを残して世を去つてしまふのに、山ばかりは、あの振分髪の昔から、私をじつと懐かしさうに見おろしてくれて、少しの變化もない。

勿論、私が長へに眠つた後も、山はかうして懐かしい翠を湛へて居るであらう。

自然の美、自然の力の前に、私は只何とも知らぬ涙を止める

事が出来ないのであつた。(婦人の立場から)

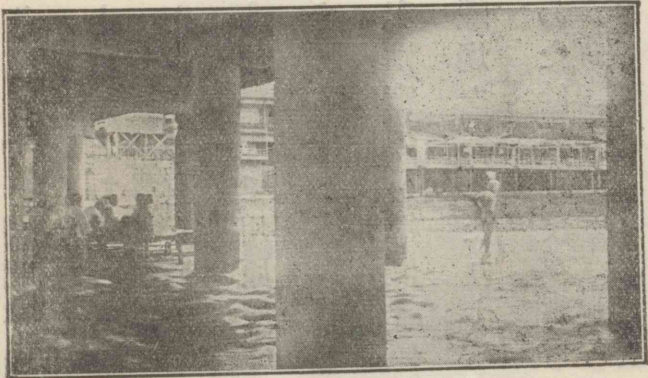
*
本名徳田浩司。
文學者。

二一 夏の京

近松 秋江

そよとの風も無く、鴨川の岸の柳さへぐんなりと萎れたやうになつて、かんく〜照りつける眞夏の日を浴びてゐる京都が眼に浮んで来る。其處をけたゝましい響を爲して京阪電車が軋り去る。河原の涼み臺も赫々たる烈日の下に寂しい空家のやうに見捨てられてゐる。眼を上げて比叡や愛宕を仰ぐと、水氣の多い空の彼方に白く霞んで居るのが、まるで汗ばんでゐるやうに見える。それでも四條の大橋は、日盛りにもかゝはらず絶えず人が通つて居る。

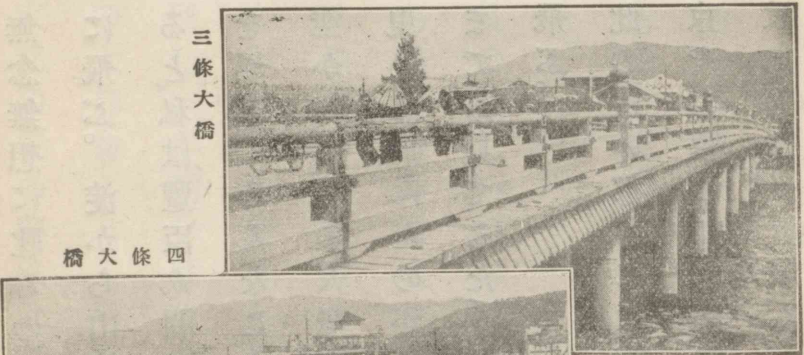
京都の夏は慘酷に暑い。



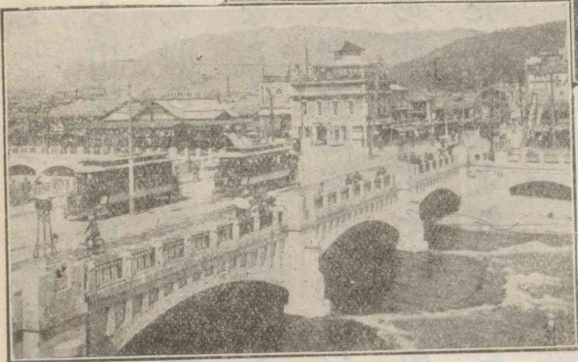
鴨川原の夕涼

私は或年の夏四月から七月の末まで祇園の近くに居たことがある。暑い京都でも又此の邊ぐらゐ暑いところは無いのである。こゝは正午を過ぎて太陽が少し西に廻ると、鴨川を隔てた對岸の町の屋根の上に見えてゐる愛宕の山に夕陽が没するまで、日を眞正面に受けて、情容赦も無くかんかんと照りつけられるのである。

てゐる疊の上に、じつと身動きもせぬやうにして、毎日々々苦熱の六七時間を過すのであつた。そして夕陽が沈んでしまふと、むうつとする二階座敷から屋根傳ひに、川に臨んだ屋上の涼み臺に立ち出る。西河岸（西か）の方は日のかげりのも早いので、川原にずらりと並んだ涼み臺はもう早くからさまざまに客が出て涼みをしてゐる。私は宿の小婢（コウナ）に手傳つて、涼み臺に莫塵（カサ）を敷いたり雪洞に蠟燭を點（トキ）したりする。さうしてゐる中に川原を焼付けてゐた餘熱も段々薄らいで来て、水の面から吹いて来る風が冷く肌に觸れる。上は三條大橋から下は四條大橋わたりまで、涼しい燈火が蒔き散らしたやうに續いて居る。夜の



三條大橋



四條大橋

更けると共に、風は水のやうに冷くなつてくる。京都の夏ぐらゐ暑い處も無いが、其の代りに比叡や愛宕などの高い山で圍まれてゐるから、夜の涼氣はとても東京あたりでは味ふことの出來ない唯一の慰めである。私はきつと其の涼み臺の上にあふむけに暗い星の空を眺め入りつゝ

無念無想に耽るのである。流星が眼を射るやうに飛ぶ、頻りに飛ぶ。淀から山崎の見當の空に落ちる。それを見てみると、私は豊臣太閤の榮華の夢を聯想する、明智光秀の運命を思ふ。そんなことを色々思つて居ると、此の度は比叡の空から、京都の大空を遠く斜に渡して大阪の方に長く尾を曳いて飛んだのがある。それが消えた後の空を、私は何時までも見てゐた。大阪よりもつと先の淡路の方の空にも飛ぶ。

此の古い都會には、誇つていゝ天然の特長が數々あるが、東京や大阪の如き塵埃の都に比べて、何よりも心地のいゝのは、如何に炎暑燠くが如き夏日の夜でも、空氣が清澄なため

五月前り塵埃かすく

朝夕涼しき灯の色

に、灯の色の飽くまで澄んでゐることである。私は四條の通りに續いて居る軒燈の涼しい色を讚美しつゝ、ひとり街頭に立つて、うつとりとそれに見惚れることが度々あつた。

其の涼しい灯の瞬く京の夏の夜は、街に黄塵が起たないから、鴨川の畔に出て夏の清夜が樂しめる。

其の夏の夜の涼みも新曆八月十六日の夜、東山にともる大文字の火を最後として、それが済むと、残暑はまだなか〜、烈しいが、朝夕はめつきり涼しくなる。朝夕の涼しさは外の大都會よりも早く来る。

京都の夏の興は七月の十五六日の祇園祭から、例の東山の

淀川は大通りである。横堀は小路である。町を通るより川を通る方が大阪の特色が味はれる。夏は殊に夕日が暖簾に消える頃、手近の堀へいつて小舟に乗ると、風はまだ兩側の軒の釣葱にも動かず。竹簾を漏れる燈火、縁側の岐阜提燈の影がゆるい流に流れぬ上を流れて、小橋の數を數へながら、やう／＼大川へ出ると、風は俄に舟の灯を吹く。舷を扇で叩いて謠や、淨瑠璃を唸りながら、舟生簀へつけて料理をあつらへ、舟へ運び入れて更に溯る。我等の子供の頃などは難波橋と天神橋との間に中洲があつた。それへつけて上つて暫く休むと、寄つて來るのは果物の舟、鮪の舟、花火の舟、落語の舟、此方の舟では飲食して彼方の舟の藝を見

物する。一つ濟むと互に離れる。知人の舟とはからず逢ふ。舟を寄せて舟に語る。盃を交して舟に別れる。水はいよ／＼赤くなる。舟には絃歌の聲が高くなる。俗を喜ぶ者は中を巡つて夜を忘れる。雅を求める者は更に溯つて天神橋の下を通る。天満橋の下を通る。網島の横を通る。櫻の宮あたりまで上ると、花火も聞えぬ。物賣の舟も追ひつかぬ。絃歌も誘はぬ。始めて舷に寄るのは月である。

水の都の涼しさはこゝである。暑い町の解脱はこゝである。しかし近年川涼みは振はぬ様になつた。大川の水まで暑くなつたのか。月まで赤くなつたのか。舟より、電車

があたりの海山へ涼みにまで走らせる爲か。抑、解脱といふ事を求めもせぬ様になつた爲か。(畿内見物)

名は藤吉。俳人。新俳句を唱道す。

山梨縣都留郡にある村。川口湖の東南岸にあつて吉田山中などに通ず。

山梨縣都留郡にある町。富士山の北口麓。

三三 富士登山

荻原 井泉水

船津の宿で、大分後れた晝飯を取りながら、私達は富士登山に就いて相談した。宿の主人に聞いて見ると、お山の天気は心配なく、夜にかけて益、晴れるとの事であつた。それでは登ることにしよう、と衆議が一決して、膳を撤するや否や、快い興奮を感じつゝ、船津の町を離れた。

吉田は登山口の一つである。此處で登山の用意をした。先づ馬返しまで平坦な道が二里半、次に五合目まで上りが

一里、合せて三里半は馬が利くと。人數だけ馬を七頭備ふ

事にした。五合目から頂上までは、如何に急峻な路と云つても僅か一里半程である。たとひ這ふにしたところで、夜の中に登れぬ事は無い。

頼んで置いた強力は來た。二十歳ばかりの青年であつた。馬は淺間神社の裏手に揃へてあるといふので、そこまで歩いた。

淺間神社の杉木立に鳴いて居た蝸も、もう聲を噎し、時計の



富士登山

*吉田口の富士山麓にある社。

針は六時を指して居た。皆乗つた。

お山は實に鮮かに晴れて居た。夕陽の光彩を失つて、唯黒く隆々と盛り上つた偉大な土の堆塊ツノケが却て彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲一つの曇さへ無かつた。晝の光が消え失せたに拘らず、空氣そのものが光を持つて居るやうに薄青く暮れずに居た。

路はお山へ向けて眞直について居た。馬は慣れきつた路を心得顔に、自分の好きな歩調で私達を運んだ。此の邊の裾野は小松が多かつた。小松の中に秋草が様々に咲いて居るらしいが、たけの低いのは皆夕べの色に埋れてしまつて、背の高い女郎花と路傍に近く咲いてゐる月見草とだけ

が暮れ残つて居た。ふと西を見ると、今しも顔を出した明

星がたつた一つ、ばつちりと象嵌けいがんされてゐた。それは此の

限ない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の

山の昔ながらの尊さを、其處に參ずる私達に暗示する表象ひょうしょう

かとも思はれた。私は段々とうつすりした靄もろに包まれて

行くやうな、あたりの景色を馬の上から眺めながら、そして

其の目でじつと明星を見つめて居ると、何と云ふことなし

に涙ぐましい程な、美しく淋しい感激が心にこみ上げて來

るのを覺えた。

「お、月が……」私は覺えず馬上で斯う叫んだ。それは東の空に低く、磨ぎ澄まされたまん圓い光が玲瓏と搖ぎ出た所

ふしう山版

二高みかし

天まもい

はレかりたる

オのを

いま

いはほめ



であつた。月がさし出ると共に景色の調子は凡て一變した。今まで一樣に薄青かつた空や裾野は、くつきりとして光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。さうしてお山は愈々黒く大きな姿を以て現れた。其の半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鑲められて居た。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た、そして私達の七頭の馬が長い黒い影を投げ始めた。

馬返し茶屋に着いた時は、夜氣を感じずる程であつた。是から山も高くなるし、夜も更けるからと強力が云ふので、私達はメリヤスの肌着を着込んだ。櫓たぐいの明りの暗い手許で鑑

鈍を一杯づつ食べた。そして各自の馬に乗つた。「今夜のお山は好いぞ。」こんな日和は今年になつて始めてだ。」馬子と茶屋の亭主とが、斯う話してゐた。

一合目から上は樹の茂みがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりとかぶさつて居るので、路も暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提燈を點けて馬を導いて行く。後の馬は唯先の馬に續いて暗い中を行くのであつた。

勾配も段々急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音が憂々と鋭く鳴つて來た。さうして暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛散つた。併し樹の枝の疎らになつて居る處では、

月の光が雪のやうに葉の上に積みたまつて、其の邊を明るくしてゐた。又、ふつと茂みのとだえて居る處では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を馬は勇ましく歩を運んだ。

三合目・四合目の室はもう戸を閉ぢてある。その前を、ひっそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうにぴたりと止つた。樹帯はこゝらまで、全く盡きて、月はお山一面を照して居た。私達は馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、大人しく足を揃へて居た。私達は其處の室に這入つて熱い茶をうまく味つた。そして用意して來た夕食を

たべた。室には宿泊してゐる人が、蒲團一枚を引掛けて、ごろごろ寢て居た。

五合目は「天地の境」と稱せられて居る。如何にも此のあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、しつとりと薄い夕霧が襲つて來るやうに思つたが、それがもやくゝとした白い雲となつて、此處から見ると低く裾野一面を蔽うてゐる。其の彼方に吉田の町の灯が近々とかたまつてゐる。

馬と馬子とを返した後の私達は強力を先に立て、靜かに一步步を踏んで登つた。此の山の夜を踏んで居る者としては實に私達だけであつた。鳥も居ず、蟲も居ず、死のやう

五合目から
天合目まで
何処
月の光が
夜

な静寂の中に七人の金剛杖の音のみがかちりくと岩に當つて鳴つた。其の杖は五合目の室で「天地の境」といふ焼印を押してくれたものであつた。月は誠によく冴えて何の遮る物も無い山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過ぎてゐる。其の針がはつきりと月光に讀まれた。

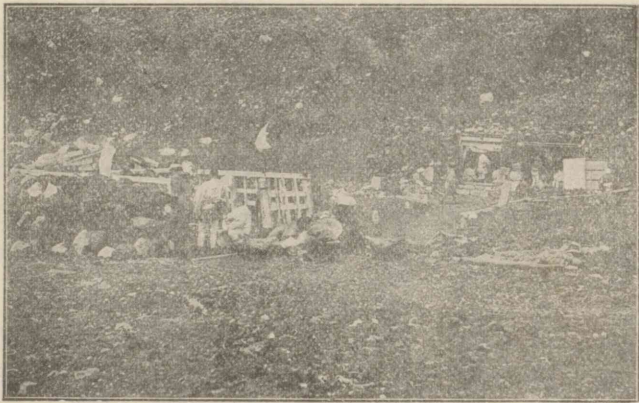
自分の服に觸つて見ると、露でしつとりと濕つて居た。蕨や笠は暑さを凌ぐ爲に身に付けて來たのであるが、それが今では露を凌ぐ爲の物となつた。山肌の岩や砂に縫つて生えてゐる僅かの青い物——トナリ偃松や濱梨の木や蘗などの葉にも露が光つて居た。空を見ると疎らな星が、大

きな露の雫のやうにきら／＼して居た。さうした星がふ

つと流れて下界の方へ落ちたりした。其處から見ると白い雲が海のやうに浪立つてゐる、下界の方へ。

六合目の室はびつたり閉ぢて居たが、其の前に差掛けのベンチが出来てゐる。其處へ腰掛けて休んだ。

やうな路が無くなつてしまふ。僅かに人が踏んだ跡の砂



六根清淨
六根を清く
らかにしむる
六根
月、目、鼻、舌、身、意

六合目より
九合目まで

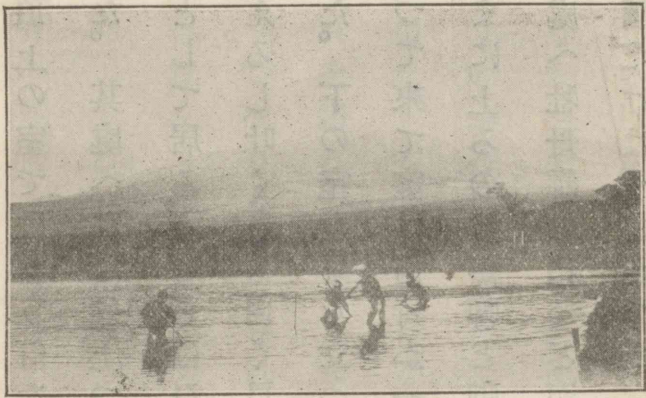
が、それと判るのであるけれども、踏み堅められてゐるので
は無く、足を掛けると、さくり／＼と這るので、歩みは著しく
捗らなくなつた。「六根清淨。六根清淨」。登山の行者が唱
へる此の言葉を、先へ行く者と後になつた者とお互に呼
び交して心を引きしめ合つて進む。
七合を越して八合の室に入つて少し休んだ。時計を見る
と、もう一時を過ぎて居た。非常に眠い。山に酔つたと云
ふよりも、寝不足の爲であらう、頭がふらく／＼する。さう云
ふ者が私の外に二人あつた。自分の莫塵を山の勾配のま
まに砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一
本の影も無い。月は丁度額の上に懸つて、愈々天心に澄み切

つて居る。頭を高く仰向けになつた視線のうつろな果に、
北斗七星が爛々と光つて居る。私は其の一つを後ウカトじつと見
詰めて居た。と、其の星がふらく／＼動き始める。すうと流
れるのでは無く、小さな螺旋形を畫いて躍つて居る。不思
議だなと思つて、他の一つの星を見詰めた。すると其の星
も亦螢のやうにゆらく／＼と舞ひ始めた。是は幻覺だ、さう
思ふと眼の疲労の激しいことが解つた。又月を見た、月の
光が眩し過ぎて涙が滲み出した。
九合目には久須志神社といふ社が立つてある。其處へ這
入つて休んだ。神官の二三人が、中々寒い、併し今朝は氷が
張らないから——」などと、もう朝の言葉を交して居た。そ

御衣

して、日の出まではまだ二時間近くも間があるので、私達は頂上で御來迎ミケムカヒを拜むことにした。「頂上へ行く方は御祓ミハヒをしていらつしやい。神官は斯う云つて祝詞イハヒコトを讀んだ。それは此の佳き日にお山へ詣でる佳き人々の一族の平安を祈ると云ふ意味を神代の長々しい言葉を集めて綴つたものであつた。さうして大きな御幣で皆の頭の上をばさりばさりと祓つた。外へ出ると、是まで感じなかつた風が冷え冷えと動いて居た。それが黎明レイメイの近い事を思はせた。又其の風がふらくした頭を幾分かしつかりさせた。月の光は漸く衰へ始めた。其の上路が東に廻つた爲、西に傾きかけた月が頂の峰の陰になつてしまつた。光と影と

山の上下
下を望み
下を望み



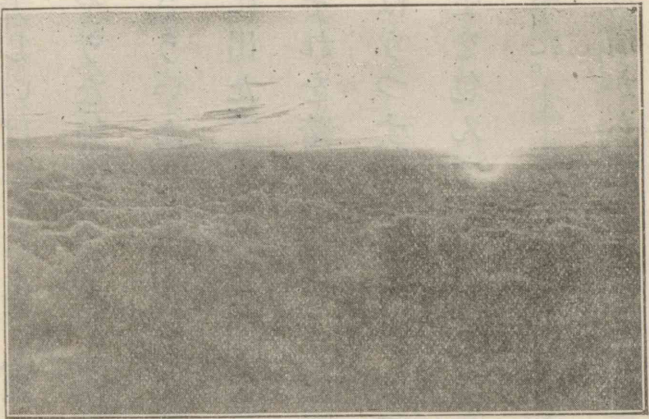
の差別は薄らいで、裾野の夕べに見たやうな混沌とした青白い色が、一様に漂つて來た。其の混沌たるもの、中から新しい光の産れるのを待つばかりになつた。下界——殊に甲州に寄つた方——は雲がぎつしりと鎖して居た。其の雲の外れに、今迄は雲と同じやうに白く見えて居たものが、大きな勾玉カクヨクの形をした湖水であるといふけじめもやつと明かに認められた。それが山中湖であつた。私達は斯う

して鳥瞰的に此の湖を眺め得た。

頂上の室ではもう灯を消して居たが、屋根の下は薄暗かつた。其處へ私達は上つて御來迎を待つことにした。じつとして居ると、寒さはひし〜と身に迫つて来る。手は凍えるし、吐く息も白く見えた。襜褕を借りて被る者もあつた。下の室を早く立つて來たと見える人々が、ちらほら登つて來て、室は何時か一杯になつてしまつた。皆草鞋のままに上るのだが、脚と脚とを入れ違へて餘地も無いやうな處へ牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒だけはうまかつた。

曉紅！ 朝の始まる前の先觸として、がんがりとはかかし染

にされた水平の紅さは、斯うした高みから眺める時に、昏に美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊さが滲み出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ。」さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中に居た者も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には霜が置かれて居た。それを踏んで寒さうな緊張した顔が並んだ。水平の紅さはうつすりと吸取られて、雲では無いが或神聖なもの、誕生を包んでゐる幕のやうな霞が、つや〜しい光を帯びて來た。——と、一點の輝いた朱の色が、鋭い刃物で突き破つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押し分けた。と思ふ間に、其の朱の一點が見る〜擴がつて麗しい太陽の姿とな

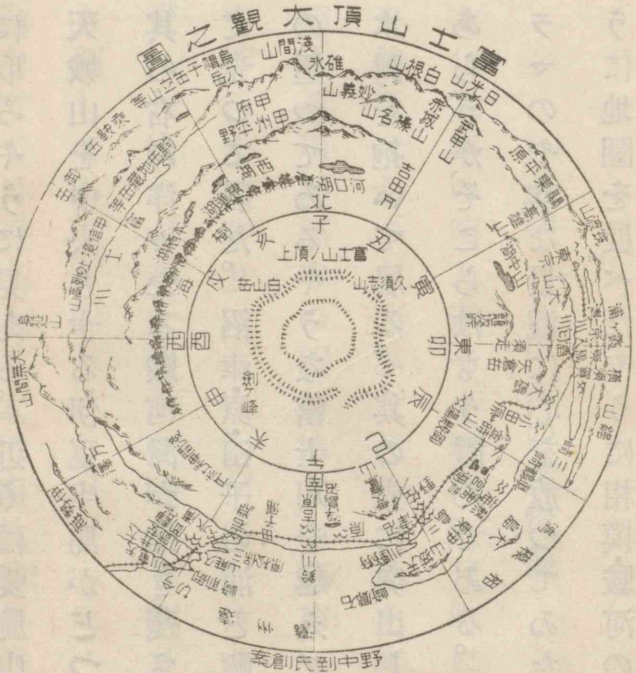


つた。刹那、新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。其の第一の光線が、やうやく 霧地に届いたのは、此の頂上に立並んでゐる私達の瞳であつた。

雲

海

朗かな朝は來た。大空は實によく晴れて居た。大地も實によく晴れてゐた。太陽を産んだ後の霞が消えた處に、烟の靡くやうに仄かに這つて居るのは房總半島である。海は空との差別は無いが、雲のやうに置かれた大島が、其處は太平洋の



中だと云ふ事を示して居た。其の手前に更に鮮かに一抹の線を引いてゐる。それが三浦半島である。海岸線に沿うて目を移すと、小さく、而も靜かに江の島が見える。馬入川が見える。其の右手は大磯であらう。小田原・熱海と

思はれるあたりには、箱根・足柄の山々と、盤に水銀を盛つた

やうに蘆の湖が、外輪山の器の中に秘められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔て、天城山を中央とする伊豆半島がどつしりと延びてゐる。其の右に洋々たる駿河灣が描き残された素絹の白さを以て光つて居た。沼津・原田子の浦と順々に南を眺めると、蛇の這つてゐるやうな富士川を越えて、三保の岬が小さく清水灣を抱いて居る。其の先に突出してゐるのは御前崎であらうか、そこらはもう霞んでゐる。私は此の大きなバナラマのやうな景觀に心を放つてゐた。さうして私は斯やうに地圖を展べたやうに相模・駿河の平野を見渡してゐた。太陽はずん／＼と高く昇つて、強いとろ／＼とした光線が、

靈山の絶頂から地の方へ擴がつて行つた。(山水巡禮)

二四 蜀山人の盆燈籠 饗庭 篁村

太田直次郎名は
單、南畝と號す。
戲號は四方赤良。
寐惚先生といふ。
和漢學者、特に狂
歌の名人。
文政六年歿す。
名は與三郎。
小説家。
東京朝日新聞記
者。
傳通院の前、今の
大門町。

文化元年の頃とかや、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠と云ふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしが多ければ、力を落し、情なき顔してかつぎ歸りけり。

途中にて日頃出入る太田南畝翁の許に立寄りて、臺所の者に、サヤク「偕々困る事かな、この盆は如何にして過し申さん。今朝

*牛込にある。

の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝^{*}神樂
阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとよ



歌南田太

り手細工にせし事にはあれ
ど、聊か資本もかゝりたり。
この分にては水も吞まれ申
さず」とかこちけり。

「かの聲は庄助にあらずや。」と問はるゝにぞ、傍の者、斯様々々
にて、又かの泣男がかこち申し候。」と言ひければ、翁は臺所に
出られ、偕も氣の毒なる事よ、顛の下が乾きては難儀ならん。

わが言ふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし。」といはれけ
れば、それは有難き事に候。いかに致すべき。」と、翁の顔をい
かにも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出
し、「これにてその燈籠を張替へよ。何か書きてやらん。」とい
はる。悦びて立歸りしが、忽ちに百あまり張替へて持て來
たれば、翁は例の草書にて狂歌やら發句やらなぐりつけて
渡されけり。

庄助は頭を搔きつゝ、一禮を述べて、荷ひ歸る途々、蓮の花を
紅入りにて書いてさへ賣れぬに、いかに先生なればとて、か
かる冗書の反古張にては買人はあるまじ。さりながらあ
れ程に仰せられし事をなれば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、

賣れ残りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も、借りて二百疋も、借りて
外商（外）の元手にせん」と、工面顔にて足も重く二三町歩む向
ふより、侍一人來かゝりしが、供の者に言付けて、「その燈籠は
賣物か」と問ふ。儲はと悦び、「いかにも賣物に候。やうく
傳を求めて先生に書いて貰ひまうしたるにて、心あても有
りて拵へ候なれども、これほどは入り申さず候。お望なら
ば差上げ申さん」といふに、「價はいか程ぞ」と問ふ。幾許と云
ひて、よき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて五十文
と云ふ。「その直にて二つくれよ」と百文渡して買行きたり。
又あとより通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし」とい
ふ。今度は息を一杯に吹きて、六十四文と云ふに、いふがま

まに又買行きたり。あとより又此方へも二つ、我にも一つ
と、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣れて、凡そ一貫二
百文骨折らずに取り、かくて女房に話せば、「誠に寐惚様は生
佛様なり。有難き事なり。明日は早くより持出で給へ、私
も参りて手傳ひ申さん。一人にては手も足るまじ。一つ
盗まれても五十と百の損なり」と、女のいふ。
夫婦は翌朝早起して神樂阪に到り、並ぶる間もなく、「蜀山人
の書いたる燈籠とは珍し」と一人立止りて價を問ふ。庄助
思ひ切つて百文と言へば、「さもあるべきぞ」とて買行く。女
房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに買つて行かるゝから
は、二百文といふとも賣れ申さん。二百文といひ給へ」と、智

養身ニ十四カ
ニ四ニシガ代
ラアカラシ
時代カアル

慧をつくるに、庄助額に手を加へつゝ、二百は餘り高かるべし、さらば百五十文といふ。夫より百五十文にて六七十を賣り、遂には先見明かなるその妻の言の如く、二百文より一文も引かずと肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切れたり。錢二十貫程、金にして三兩ばかりになりし故、夫婦こけつ轉びつ翁の許に到り、亭主を搔きのけて女房口を出し、看難い。を數千遍のべて、いかにも先生は生神様なり。と、今度は神あしらひにしつゝ、悦び歸りきとぞ。翁が醉餘の戲よく枯骨に膏すといふべし。(雀躍)

二五 禮者

太田 蜀山人

年の内は春は來にけり
一年をさし
今年をやり日人
ふはん
(古今集)

*
夕されば野邊の秋
風身にしみて鶉な
くなり深草の里。
(藤原俊成)

元日

生酔の禮者を見れば大道を

横すぢかひに春は來にけり。

永日

春がすみ立ちくたびれて武藏野の

はら一杯にのぼす日のあし。

鶉

*
一つとり二つとりてはやいてくふ

うづらなくなる深草のさと。

橋上霜

世の中は我より先に用のある

* 鶏聲茅店ノ月、人跡板橋ノ霜。(唐詩)

歳暮

* 人のあしあと、橋の上の霜。

今更になにか惜まん、神武より

二千年來くれてゆく年。

雀

雀どのお宿はどこか知らねども、

ちよつちよとごされ、さゝの相手に。

二六 大石良雄と忠僕八介

藤岡作太郎

元祿十五年十二月十五日、牙えたる月影も薄らぎ、昨日降り

梅柳作太郎
号東園
明治三年徳島藩士
云々侍士
四十二年二月三日
云々

ほと、ちす
鳴まろ、後
あま小太郎
後徳大寺の
ありあけの月

(二) 播磨國赤穂郡赤穂町。淺野家五萬三千五百石の舊城下。

(三) 徳川中期の兵學家、會津の人。江戸に住む。

し雪の上より、夜は明けぬ。朝風寒き永代橋を、同勢あまた
火事装束に身を固めて、足並勇ましく西へ渡るは、これぞ赤
穂の浪士四十餘人が今しも本望を遂げて高輪の泉岳寺に
引上ぐるなりける。見驚き、聞驚きて、噂は忽ち江戸中に弘
り、諸國に弘りぬ。何處の里も、その評判のみ喧しく、浪士の
平生の事、その一族、從僕の事までも多く世に傳はれり。
四十餘人を指揮せる大石良雄は、通稱を内藏助といふ。も
と、千五百石の祿を食みて、淺野家の國家老なりき。小兵に
して、聲低く、詞すくなく、立居振舞も靜かなり。寛文の頃、山
鹿素行罪を幕府に獲て、赤穂に預けらる。素行、經學と兵法
とを以て天下に名あり。一日、赤穂侯に對ひていはく、「日頃

* 徳川中期の儒者。京都の堀川に住む。

の厚遇謝し奉るに辭なし。聊か御恩に報いんが爲に、心腹を傾けて諸士を教へたり。蒔きたる種は生ゆる時も候べし。と。良雄もこれに學び、又京に出でては伊藤^{*}仁齋の門に入れり。仁齋評して、「この人、愚なるが如くなれども、庸器にあらず。必ず大事に堪へん。」といへり。赤穂の封奪はれし時、諸士狼狽してせんすべを知らず。良雄、日頃は重用せられず、才ありとも見えざりしが、この時に至りて、少しも周章てたる色なく、事務を處理すること流るるが如し。諸士始めてその器量に心服して、進退を一任し、その指揮に従ひて働くこと手足の如くなりき。赤穂の城を明渡して後は、諸士思ひくゞに離散せり。良雄

* 山城國宇治郡にある。京都の東南二里。

も亦國を去つて、洛東なる山科^{*}に移らんとす。嘗て召使ひし老僕八介といふもの、暇乞にとて來り、「わが君今出で立ちたまはゞ、御目にかゝるもこれや限なるべき。われ、かく老朽ちて、御供に立つことのかなはぬこそ残念なれ。せめては、形見の一品にても賜はりたし。」といふ。良雄、頭を撫でて、「今度の騒動にて、われも途方にくれぬ。重ねての仕官も面倒なれば、都近き田舎の百姓となりて、やすらかに一生を送らんと思ふなり。長々實義に奉公してくれたる禮に、何なりとも與へんと思へども、今の身の上なれば心に任せず。せめてはこれだけにても收めくれよ。」とて、十何兩かの金を取出して與へたり。

八介その包を取つて投げ「けがらはし。老いぼれたれども、八介金がほしさに參るべきか。日頃の御心も腐り候か、みだれ候か。金が大事ならば御存分に御貯あれ。思へば、代高恩の御城主は恨を呑んで御最期あり。赤穂一面、野も山も空しく人手に渡るを見ては、われら如き下藹すら、胸も涌きかへるに、三百人の侍揃ひも揃うて、腰拔侍にて候ことの悔しさよ。いつの爲とて御城主は侍を養ひ給ひしぞ。赤穂の武士に一人も魂あるものなきか。くち惜しや」と罵りて、涙をはらくと流せり。

良雄は、俯きて、物をも言はず。やゝ久しうして、「われ過てり。汝の諫言、永く忘るまじきぞ」とて、やがて筆を執つて、主従二

人の姿を畫き、これを見よ、八介。これは、わが若かりし頃、江戸にて汝を供につれて歩きし様を寫せるなり。昔を思ひ出し、これを形見に取らす。とて與ふれば、八介も、やうく憤を收め、御筆の迹こそ賤が伏家の寶なれ。いくばくもなき世に、朝夕君と仰ぎて、かしづき奉るべし」と、おし戴きて歸れりとぞ。その後、元祿十五年の冬まで、八介はながらへて、復讐の噂を傳へ聞きしか、いかに。

(新國語讀本)

二七 飛驒の山中より 遅塚麗水

毒蛇の群の、行旅の人を悩ますといふ龍が峰を突貫して、今日は炎天の下に十四里を歩き、唯今飛驒の都の高

(一) 名は金太郎。文章家。
(二) 此新開元名。
(三) 美濃と飛驒との國境の分水嶺。

飛驒國大野郡清見村大字三日町。高山町の西南三里。美濃國郡上郡奥明方村大字畑佐。吉田川の上流で鑛山がある。

山を距ること三里、三日町の寒驛まで辛くも到着、旅館に投じ申し候。

をかしかりしは、昨夜の畑佐の宿にて鍍金の飯を饗せられたる事にて候。そは宿の媪、東京のお客様にとて、多大の好意にて、米の飯を炊きくれたるが、麥一分、稗一分、粟一分の三分飯と申すを椀に盛り、其の上に薄く米の飯を盛り添へたるものにて候。箸をつけ候へば、鍍金忽ち剝落、飯と共に一驚を喫し申し候。此の邊にては、瀕死の病人ならでは米の飯を食ふ事なき由に候。菜は烏賊の鹽漬、臭き味噌汁、干瓢に豆腐の煮。鮎をと命じ候に、主人畏るゝ入來りて、鮎はござりますが、

お高うござりますと斷る。高くともよし、鹽焼にしてと命ずれば、やがて、大きき八九寸のもの數尾を膳に上せ來り申し候。山中の盛饌之に過ぎたるもの無之候。而も、甚だ廉、一尾二三錢ばかりにて御座候ひき。唯今隣房に宿りたる巡查の話に、此の邊は赤痢の流行地との事に候。今日、途上渴に任せて、溪水を掬ひ飲みしことを思へば、寒心に堪へず。明曉は早く高山に到り、かねて見んと思ひしものを見物して、急ぎ神通川に沿ひ、一刻も早く飛驒を立去り、越中富山に出づる考に御座候。

出立の前日、上野へ逃へし乳母車、はや出來いたし候事

と存じ候。子供を載せて毎朝公園へ御散歩、然るべくと存じ候。子供の寢冷、火の元共に御用心。草々。

(現代名家書簡集)

二八 螢

吉田 絃 二郎

かすかな光とも見えぬ光を命として、夏の夜を漂ひ行く螢は、闇の中に捨てられた人間の魂のやうにも思はれる。或は何時か、何時の世にか悠久^{ユウキウ}を思ひつゝ、死んだ人々の吐息のやうにも思はれる。青い火は或は明るく、或は暗く、絶えず吐息をついてゐる。音も無くかすかな光を抱いて闇の中をかける。青い光の

*
文學者。
名は源次郎。
夏、螢の光を命として、
かすかな光とも見えぬ光を命として、
夏の夜を漂ひ行く螢は、
闇の中に捨てられた人間の魂のやうにも思はれる。
或は何時か、何時の世にか悠久を思ひつゝ、
死んだ人々の吐息のやうにも思はれる。
青い火は或は明るく、或は暗く、
絶えず吐息をついてゐる。
音も無くかすかな光を抱いて闇の中をかける。
青い光の

線が、或時は一直線に、或時はゆるやかな曲線を描いて、やがて消え、やがて星の群の中に見えなくなつてしまふ。

或時は道端の小さな流れに沿うて、青い光の吐息を見る。

或時は麻畑の中に、或時は眠つたやうな黝い大河^{アヲカハ}の上に、唯

一つ飛んでゐる、一人行く旅人の如く。

廣い平原を歩く旅人は、或沼のほとり、或は或川のほとりで、そして其處からは地平線の星の瞬が見える時、群をなした螢の光と星の光とを區別することが出来なくなることを経験するであらう。

そのやうな夜である、地と天の境が取りのぞかれて、星は地に、螢は天に、そして人間の心は螢と共に天上を思ひ、天上を

歩くのは。超規的、超規的の心動も共の天に
螢を追ひつゝ、私たちはふと立止つて天上を見る。そこに



は私たちの美しい傳
説の天の川が流れて
る。時としては螢
は織女星を目かけて
高く森をかすめ、塔を
掠めて、かけ行く。

螢を追ふ人たちは、遠く稻田の原を越えて、夜の闇をたゞよ
ひ來る笛を聴くであらう。ひ夏
の夜の笛。それは都會の人たちの夢にも想像すること

の出來ぬ哀韻と悠々の思情をこめたものである。そこに
は人間の憎みも無い。そこには人間の愛慾も無い。
夏の夜の稻田の笛。私はそれを思ふだけでも苦しい。
螢を追ふ人たちよ。あの黒い瞳黒い瞳の少年の笛を聴け。天に
訴へる聲。地に訴へる聲。訴へるところを知らざる聲。
天の川も、星も、地平線も、彼自身も渾然渾然として只一つの悠久
の中に融けつゝ、やがて消えて行く少年の笛の聲を聴け。
かすかな螢の光は空を驅け、黝黝き空に消え行く。かすかな
少年の笛の音は夜の空に響き、夜の空に消え行く。太陽は
私たちに私ソロモンの榮華を見せる。夜は私たちにかすか
な螢の光と少年の笛の音を恵む。

*ヘブライの王。西
洋紀元前十世紀の
人。智慧あり富あ
り榮華をきはめた
王。

二九 漢字の音

漢字の我が國に入りし時代は詳ならざれども、支那との交通は前漢の頃より開けたれば、その文字も當時傳來せしなるべし。然れども、未だ廣く學習するには至らざりしもの如し。その後新羅・百濟等との往來頻繁となりしより、漢字も亦かの地方より傳來し、應神帝の時には、百濟の博士來りて、皇子に書を授くることゝなりし程なれば、學習の道も當時漸く開け、流行も漸く廣がりしことゝ見えたり。されば、我が國にて學者の始めて學習せし漢字音は百濟音なり。百濟音は、蓋し支那南方の音の傳はりて多少變化したるものなるべし。

又、我が國と支那との交通は、晋・宋以後に至りて、次第に盛になりしかば、我が國人は支那南方に行はれし漢字音を讀習ひて、之を傳へたり。されば漢字傳來の初に於て、我が國人の學びたる漢字音は、百濟音と支那音との兩様なりしが、兩者とも大概相似たるものにて、均しく支那南方即ち所謂吳の地方の音なりしかば、等しく之を吳音と云へり。推古帝以後、隋唐と交際開くるに及びて、遣唐使・留學生、率ね其の都長安に赴きて、その音を傳へたり。之を漢音と云ふ。長安は漢土の本部なるを以て此の名あるなり。吳音・漢音は、字ごとに必ず異なるには非ざれども、同じから

ざるものも頗る多し。遣唐使・留學生の勢力を得るに従つて漢音を奨勵すること盛になり、特に音博士といふを置きて、専ら彼の國本部の原音を學ぶことを奨勵したり。然れども、吳音は早く我が國に傳來し、久しく國人の口耳に慣れたれば、儒書は大概漢音を以て讀むことゝなりたれども、佛書は多く吳音を以て讀み、その他は漢音・吳音を雜へて讀むことゝなりたり。されば後世に至りても、普通の言葉には、吳音を用ふることを極めて多し。

金剛 人本 物 強勉 名聞 木曜
 錢 人本 物 強勉 名聞 木曜

穀價 家來 去過 武者 會釋
 物價 家事 去過 武者 會釋

吳音・漢音既に行はれたる後に於て、宋より以來、彼我僧侶な

(右の假名は吳音、左のは漢音なり)

どの來往せしもの、更に彼の國の音を傳へたるものあり。之を唐音と云ふ。唐音といふは我が國にては支那を唐代以後もなほ唐と稱せしを以てなり。唐音の使用はある少數の文字に止りて、一般に行はれたるには非ず。

行燈 甲板 胡亂 蒲團 亭 鈴

近時支那との交通頻繁となるに従つて、又、支那現今の北京音を傳へたり。之を支那音と云ふ。これも支那の地名等に用ふるのみにて、多くは行はれず。

上海 芝罘 太沽 牛莊 哈爾濱

右の百濟音・吳音・漢音・唐音・支那音等を一括して字音と云ふ。但し、普通に字音といふは、主として吳音又は漢音のことな

*國文學者。
文學博士。
東京帝國大學名譽
教授。
國學院大學長。

日本人と白
を以ての
國學のそと始り

り。(漢字要覽に據る)

三〇 國民性

*芳賀 矢一

我が日本國は、氣候は溫和である、山川は秀麗である、花紅葉、
四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民
が現生活に執着するのは、當然である。四圍の風光の吾等
の前に横たはつてゐるものゝ、凡て笑つて居る中に、住民が
獨り笑はずには居られぬ。現世を愛し、この世の生活を樂
しむ國民が天地山川を愛し、自然にあこがれるのも、當然で
ある。この點に於ては、吾々は天の福德を得て居るといつ
てよろしい。殊に日本人が花鳥風月に親しむことは吾人

の生活の何れの方面に於ても見られる。

上代における衣食住は、多くは我が國土に繁茂して居た植
物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤葛を以てく、
りつけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれ
を染め、蔓草を取つてたすきとした。日本の女の子の着物
の模様のはでやかなことは、西洋人の著書にもいつも歎賞
してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ
綺麗である。それがやがて衣服にもうつゝて來るのであ
る。昔のしのぶずりも今の裾模様も、つまりおなじことと
ある。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した友禪縮緬襦袢珍
の帯から下駄の鼻緒のさきまで、草木の模様で飾つてある。

しろたへ
楮 妙
白

自然美を好む例

色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色エロなど澤山ある。中古の女装束の櫻重ね・梅重ね・山吹重ね等も、四季折々の花手巾朝陽代、十二箇月に因んだのであつた。やさしい女流のは、當然ともいはずが、武士の戦争に出立つ甲冑カウケウにも小櫻威・卯花威・澤瀉ササ威などいふがある。いかにも優美ではないか。又、旗や差物に蝶や笹龍膽ササリンドウや澤瀉をつけ。皇室の御紋も菊・桐で、徳川家のは葵である。今日の家の定紋にも桔梗・櫻・梅・鉢・牡丹・蔦・藤・松の類が最も多い。それから、食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅・牡丹餅を始として、菓子屋の目録を一見すれば、一層その多いことが分る。形も、花木に取るのが多い。菓子には別して多い。汁粉に

は十二個月の雅名ガがあり、酒にも櫻正宗・菊正宗がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられ、魚類の料理にも植物を用ひ、牡丹餅を贈るには重箱カウケウに南天の葉をしく。其の他、庭園の構造でも、室内の裝飾・什器モノでも、家屋の建築でもすべて植物を用ひ、自然のままの趣味を有して居る。挿花の術、箱庭作り、繪畫など、皆我が國人獨得の伎倆で特殊の發達をして居る。すべて、花を生けるにも、これを畫くにも、その生きたまゝ、自然のままにするのが美しいのである。枝をむしり取つて花ばかり花瓶に挿し込むのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのままに、天地の配合を宜しくあらはすのが、生花でも盆栽でも、日本人の好みである。日本

人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。
 我が國の文學に、自然を吟詠したものゝ多いことは、いふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つて居ることや、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふを長所とすることがわかる。誠に、上古から近世までの歌題の大半は花鳥風月である。軍記・謠曲・淨瑠璃なども叙景の文を點綴して精采を生ずる。俳句に至つては、季の無いものは句にならぬことになつてゐるのである。
 凡そ、四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことが

みろく又序ト
 自然を多く取り入
 けり例

無い。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、即ちあはれを知ることである。源義家や源三位頼政や平忠度等の日本武士として優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。頼朝も尊氏も秀吉も太田道灌も、暇ある時には、風流の技を翫んだ。日本の武士道は自然の美を愛し、物のあはれを解することの一つの要素とする。

英雄豪傑ばかりではない、日本人ほど國民全體に、あはれを知つてゐる、即ち詩人的な國民は、恐らく世界中にまたとあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳句を作る。花見遊山の時には、上手でなくとも、一句作つて、興味を

添へる。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、詩人的國民はまことに遊事に忙しいのである。

(國民性十論)

三一 蟲の音 沼 波 瓊 音

私は一年の中で秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きてゐるか」と問はれると、「秋を味ふのが、生存の一つの目的である」と答へたい位私は秋を好む。そして私が秋に對して感じる心持はどうかと云ふに、荒立つた後に來る澄んだ心である。例へば悲しいとか腹立たしいとか、感情が烈しく動いた後に、非常に靜かな落着いた氣

*名は武夫。文學者。第一高等學校教授。

持になる。其の荒立つた感情ののちに來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい戦争に飽いて發心した心持にでも喩へようか。兎に角、細かく優しく、そして澄んだ感じである。さういふ心持が秋の風物にはどんなものにも現れてゐる。見るものでいふと、日の光、雲、草花など。香で云へば木の花。觸覺では冷たい風。聽覺では蟲の音。中でも蟲の音に秋の感じが最も深い。

耳に觸れるものでは、春はいろ／＼な小鳥が鳴く。又夏の晝には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却てうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は單調で、蟲の聲ほど複雑

な、豊富な、そして細かな感じを起させない。其の點に於て
蟲の音は最優等で、さきに述べた秋の感じなり、味を現して
ゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふの
か、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は内的であ
る。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開くといふ趣が
ある。

蟲の音は、俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の
中から鳴初める。それも好い。秋に入つて、月夜に鳴くのも
好く、闇夜に鳴くのも好い。又聞きながら眠に入るのも
好く、夜中にふと目覺めて聞くのにも趣がある。朝早く聞
く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それと異つた

情趣があつて、何れも好い。殊に夜汽車にでも乗つて行く
と、或淋しい驛へ着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅
のあはれも一入に覺えられて、深い味がする。又夜の銀座
の明るい賑やかな通りを歩いてゐて、細い暗い露地に入る
と、足許で蟲の音がしてゐる。更に趣が深い。
それから秋の夜なく、蟲の音を聞馴れてゐたのに、冬の初
になつて、全く何の音もしないのに氣がつくと、たまらなく
寂しさを覺える。(しら椿)

一名は君美、徳川幕府の儒者、六代將軍家宣に重く用ひられた。
三徳川二代將軍秀忠

三三 松平信綱

新井白石

或時、若君大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巢をくひ、子を生

*松平信綱の幼名。

みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせたまひ、長四郎とりて參らせよ。」とあり。長四郎年十一歳のときなれば、いかにも叶ふまじきよし辭しければ、晝は驚きて飛去ることもありなん。巢くへる處をよく見置きて、日暮れてこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く足音もしなん。只汝取りて參らせよ。」と侍サカふ人の教へしかば、力なく、日暮れてこなたの屋よりして傳ひ傳ひ行く。既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、踏損じて御坪の内へどうと落つ。

將軍家御刀取つて障子引明けたまへば、御臺所燈火取つて出でさせたまひ、御覽ずるに長四郎にてありけり。將軍家

不思議に思召して、「汝は何しにこゝには來りぬぞ。」と御尋ねありしに、「今日の晝、この御殿の屋の軒端に雀の子を生みたるを遙かに見て、餘り欲しさに參りて候。」と申す。將軍家「いや、おのれが心にはあらじ。誰が教へけるぞ。」と色々に御推問あれども、幾度にて初め申し、言葉に變らず。「おのれ事の由ありの儘に申さず、争ふこそ年にも似ぬ不敵なれ。」と仰せられて、大きな袋の中におしいれて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけてさせ給ひ、事の由ありのまゝ申さざらん程はいつ迄もかくて候へ。」と仰せけれども、尙争ひ申すこと初めの如し。

夜已に明けて、常に御座に出でさせ給ふ。御臺所は夙く心

得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰せなり。」と申さるることを深く感じたまひて、女房達に仰せて、朝がれひ召して「是たうべよ。」とて賜ひて、又御手づから元の如くに縫はせ給ひて、置かせ給ふ。晝の程將軍家入らせたまひ、又御推問ありしかど、終に言葉を變へず。御臺所御詫言ありしかば、さらば向後の事を慎むべきよし仰せて、御宥しあり。

將軍家御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にておひたちたらんには、竹千代殿の爲には雙なき忠臣にて侍らんものぞ。」と、殊の外悦ばせ給ひきとなり。(藩翰譜)

*名は操。著述家。明治四十年歿す。

三三 美濃の隠家

*岸上質軒

かねて期しつる事ながら、昨日まで纏ひし綾羅錦繡を荒袴アラハカマ衣と着かへしのみかは、水汲み薪樵タケヤキる業助くるは、唯一人の老僕なれば、山風寒き埴生ハニフの小屋に、良人に事へ、兒をはぐくみ、炊ぎ洗濯に日を暮し、夜は孤燈の下に、麻紡み絲繰りつゝいとまめくしく勞きけり。されど生ひ先望ある幼兒達の、賤が子等と遊び連れて、餘念なげなる様を見ては、流石に優しき親心の「あはれ由緒ある武士の兒と生れながら、一生を花さかぬ埋木ウレキとなしはてん事のかなしさよ。」と歎かれて、折々は手織布子の窄セマキき袂を濕ヌルしけん。

幼き兄弟は以前の榮華を忘れ果て、獵師・木樵の子等に馴れむつみては、己れも亦先祖代々の山賤トノセの如く覺えて、母が苦心を知る由もなく、日々野山に遊びくらしつゝ、見やう見まねに兎逐ひ柴こる業さへ覺えて、互に友とし行きかひけり。處の子等は、山刀・鍬・鎌の外見しこともなき眼に、あてやかなる具足調度など見出でて歸りて親々に斯くと物語れば、物識めきたる老人どもは、さてこそ彼處の浪人殿は確かに京の歴々が流されて來られたに相違あるまい。兄弟の兒も母ぢやの仕附が良いやらして、悪さはしたがら行儀がよいぞ。」と鼻うごめかせば、深い山には猪鹿の種は盡きぬに、瘦せても枯れても京の歴々のはたとあれば、金の茶釜の一

つ二つはあらうも知れぬ。」と何心なき里人の風説を、いかにしてか野伏・山立どもの聞きしりたりけん、さらば彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。好き隙あらば忍び入りて我等が榮耀ヨウヨウの元手にせん。」と、竊かに談らひたりとは固より誰も知るよしなかりき。

主人稻葉正成はかりそめの風の心地して打臥したるが思の外に病勢つのがりていたう衰へたり。さらでだにかひがひしくまめやかなる福女は、良人の病に懼りけるより、日夜帯をも解かぬ看病に、すこしも怠なかりけるが、其の誠心の通じたりけん、今宵は熱も稍低うなりしと覺えて、心ちもさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそ

は勞れ給ひぬらめ。暫しが程だにまどろみて、身をいたはり給へ。」と、情ある良人の言葉、むげに否まば、なか／＼に病の爲に悪しかりなると思ひければ、「さらば暫しが程御免あれ。」とて、久々にて己が臥床に入りぬ。

されど病む良人が事、幼兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。折しも冴ゆる山風につれて、遠寺の鐘のきこゆるを數ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を視れば、頑是なき幼兒の、寝顔に笑を含めるは、如何なる夢路か辿るらん。さてもかゝる片田舎に人となりなば、いつの日か成り出づる期あらんなど、又も來し方行く末の事など思ひ出でて、眼はいよ／＼さえまさり、思は

ずも太き息のつかるゝを、病める良人に悟られじと、強ひて夜着引被きて睡れる様を装ひけり。

折しも、枕邊の兩戸がらりと開きて、ばら／＼と足音立て、はや眼の前に立ち現れたる四人の黒き影は、問はでもしるき曲者なり。あまりの意外に驚きて、跳ね起きたる福女、何者ぞ。」と聲かくれば、問はるゝ迄もなし、夜の稼をする者なり。

今宵夜更けて音づれたるも、此の家に蓄へたる金銀財寶の有らん限を申請けんためぞ。命惜しくば、資財残らず出して我等に捧げよ。否まば病みほうけたる此の家の主人を血祭せん。」と、簀子荒らかに踏鳴らして、息まきかゝるに、福女は露ばかりも慌て騒げる氣色なく、さる儀ならば無用なり。

主人の病めるを窺ひて、女と侮り入込みたる野伏のしれものども、そも我を誰とか思へる。明智殿の御内に鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚なれ。汝等如き盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の振舞其處動くな。といひも終らず、床に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業ものゝ大太刀おつ取り、矢庭に二人を斬つて捨て、猶も漏らさじと斬立つるに、残れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃去るを、福女は追うて庭口まで出でたりしかど、如法闇夜に紛れていづちいにけん、跡追ひかけん術なきのみかは、病める夫の上、幼兒の上、痛くも心に懸れば取つて返しぬ。

この事誰いふとなくうはさに上りて、さては心さまの雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへすと、いみじき女性よ。とて、人々に語り継ぎければ、盜賊ども聞きおちして、其の後は隙窺ふこともあらずなりぬ。

福女とは誰ぞ。これぞ後には賢女の鑑と仰がるゝ春日の局その人なる。(春日局)

三四 銀杏樹 水野 葉舟

私の室の前に出て見ると、東南の丘に槻櫟などの落葉樹の

*名は盈太郎。文學者。

林が見える。其の丘の上、其の林の端に寺があつて、其の寺に、一本の銀杏の大木が聳えて見える。落葉季になつて其の丘を見るのは、一種の壯觀である。あらゆる木が落葉して了つて其の姿を露出して居るのを見ると、其の樹の生命の大小を明かに示して居る様だ。枝を広げて居る榎は、其の古い、ふしくれだつた幹を並べて居る。すらつとした櫟の木。其の枝が各、縦横に分れて居て、其の細い先までが透して見える。冬の空の澄み切つた時、夕方の少し紫がかつた空の下に立つて見ると、其等の樹の生命の力が、直ちに身に迫つて來るのかと思はれる事がある。林と云つても、廣い山野で育つた人の考へて居る林と同じ

に思はれては困る。此の林はたしか其の寺の墓地を覆つて居たのであらう。私の感じるのは、特に其の林の端に聳えて居る銀杏樹である。高さは大方五丈もあらう。其の林の樹よりも、一段と際だつて其の姿を表して居る。樹はもとより古い。其の樹の落葉して居る時に見ると、幹は其のふしくれだつた皺までが見える。枝は此の樹の特長として、丈夫さうな、柔かみの無い、直線的なのが、幹に叢生して居る。それが、先の方になるに従つて、すこしふくらんで、上端はやゝすぼんで北の方に靡いて居る。銀杏樹は特殊の輪廓を持つて居る樹だ。

此の樹を見ると、何時も此の樹の「種」の歴史が思ひ浮べられる。「世界最古の植物」と云ふ様な一種の不思議を籠めた表象を感じるのである。其の幹の工合、其の枝の工合、全體の輪廓、それらがすべて此の不思議を表して居る謎の様に思へるのである。それが夕映の空に聳えて居る時には、一層此の感じを深められる。空一體に落日の光が流れて四方が紫色にしつとりとして居る時、すつくと立つて居る其の樹を見ると、解きにくい、不思議が目前に据ゑ附けられて居る様である。其の上に其の直立して居る樹の姿が如何にも悲壯な心を表して居るではないか。此の世界に於ける生存の最も長

い歴史を、此の空と日光とに對つて比べて居る様である。其の樹と時を同じくして居たものは、時の上に起つて來た大擾亂・大暴風雨に際してすべて滅び去つた跡、獨り淋しく新しい時代に殘されて居る心は如何であらう。見ゆるもの、聞ゆるもの、凡てが、現世界のもので、此の種族とは何等の關係のない者ばかりの中に、今日も現世界の萬象と共に夕映を浴びて靜かに暮れて行く日を送る心は、果して如何であらう。あゝ此の樹の存在は實に悲壯な不思議な運命である。たゞ現世に在らねばならぬ故に、在る。これ程いたましい運命があらうか。神祕！自然は神祕の宮殿である。

二

時が次第に移つて春になると、此の「神祕」が眼を覺して、活動し始めるのを見るのだ。空には優しい日光が照して、青い空に少し霞が懸つた様になると、そこらの樹は一齊に若芽をふいて、そよ〜と風に吹かれる。

しかし、此の丘の林の樹は、其の時一番遅くまで冬枯の姿をして居るが、やがて、楓の小枝が、何處となく赤ばんで來ると思ふと、そこらが緑に霞む。一番後れて、銀杏樹も芽をふく。直線的な枝に芽がふつくりとふくらんで來ると、其の太木は全體薄緑をして見える。其の緑は一日々々と見て居るうちに明かになつて、三日・四日・五日と日が經つに従つて、さ



老 銀 杏 樹

つと照す朝の光に、ふさ〜した若葉が輝いて見える。此の樹の眠が覺されたのだ。覺めて、また此の大氣を呼吸しようとして居るのだ。みづみづしい緑の葉は、水禽の足の形をして、一房づつ下つて居る。それを見て見給へ、誰でも此の葉が、此の「種」の運命を新しく物語らうとして居るのを感じるであらう。すると或晩嵐が來た。思ふさま吹いて〜、風は無慈悲にも若葉を散々に吹きちぎつて行つた。其の恐しい音。驕

慢な仕うち。家の中で聞いて居ると、此の世界のものが皆、聲をあげて叫びながら、其の暴力になぶられて居る様であった。世界の平衡が破れて、恐しい力が俄に動き始めた様であつた。

次の朝、目を覺すと、昨夜の嵐は一夜の中に静まり返つて、空は更に美しく晴れて居る。庭に出て見ると、そこら一體に若葉がちぎれて落ちて居る。楓、柳、榎、それらの葉が、小さい莖のまゝちぎれて居る。其の中に銀杏樹の葉も交つて居た。

それを見て、銀杏樹の大木にも如何程かの擾亂があつた事を知つた。が其の樹を眺めると、嵐の後の今朝の澄み切つ

た空に、大きい姿がたゞ静かに聳えて居る。緑の姿は日に輝いて、常の形がたゞ大きく見えるばかりである。

家を出て二三町其の樹の方に行くと、町の通りに、やはり其の葉が吹きちぎられて、そこらに落ち散つて居た。其の一つを拾つて見ると、實に巧を盡したものである。葉脈の線の工合、緑の色などが見るから自然の「眞實」が迫つて來る様に思へる。私はつくづく、一夜の間に其の樹にも大事件があつたのだと思へたのである。

あゝ、此の銀杏樹はやはり現世界に存在して、現世紀の嵐にも遇ふのか。

あゝ存在は、それ自身不可思議である。

三

それから秋になると、此の樹に實がなる。黄色な肉でつゝまれて、其の實の形が面白い。何處か熱帯の椰子の實に似て居る様だ。一寸見ては、さうは思へぬが、よく比べて見ると、なかく似て居る。

私は其の實を見て居ると、それに、實に深い痛ましい運命の約束が籠められて居ることを思はざるを得ない。よく考へて見たまへ。此の實が土に埋まつて濕氣と溫度とを受けて二葉の芽が出る時、種の使命を帯びて生存の形を表して來る時、すでに其の種の世は過去の中に葬られ盡して、此の世とは相結ばれぬ者である。現世の圏外ケイガイに置かれた様

な運命を荷つて居るのではないか。

初の幾萬年は、永劫エイキョウの海の中に消え去つて了つた。そして後の幾萬年も亦、疾走しつゝ、しかし、擾亂し、沸騰し、叫び、歌ひ、夢みつゝ過ぎて行くのではないか。此の間に立つて、銀杏樹は在らねばならぬ故に、今日も立つて居るのだ。

人類にも同様の悲みがある。文明とは何等の關係なく、ただ舊い歴史の物語を荷つて、時から時の間を過しつゝあるものがあるではないか。又は烈しく變轉して行く思想の潮流の渦卷の中に、捲入れられ、残し去られて、古い時代の思想と感情とを抱きながら、新しい時代の日に照されて居る敗殘クハゼンの人もあるではないか。心を靜かにして思ふ時、これ

